

## 第二回石塚・やすいの対談に向けて

予備対談 聞き手…佐々木隆

### やすいゆたかの

### 『フェティシズム論のブティック』以降

#### 目次

はじめにー石塚・やすいの出会いの奇跡	1
1、聖餐による復活仮説の登場	6
2、「西田哲学入門講座」	13
3、『評伝 梅原猛 哀しみのパトス』	25
4、『グローバル憲法草案を作る会掲示板』	37
5、『ネオヒューマニズム宣言』	39
6、宗教のときめきー三つのL	46
7、ファンタジー人間論の大冒険	53
8、熟年よ、今、歴史がおもしろい。	59
9、日本の宗教 日本的霊性と日本神道論	67
10、中国思想史講座	

### はじめにー石塚・やすいの出会いの奇跡

佐々木隆：今日（二〇一〇年八月二十五日）は石塚正英さんとの再対談への準備として、まず前回の対談（一九九七年三月後の二人の足跡を相互に問い直すという段取りなので、石塚さんに成り代わって私が、やすいゆたかさんに『ブティック』以降を問い直させていただくということになりました。

その前に、やすいさんの中では、前回の石塚さんとの対談はまことに奇跡的なものだと思われ、位置づけられておられますが、奇跡など信じておられるのですか。

やすいゆたか：私は戦後生まれですが、といっても終戦後一月の一九四五年九月生まれです。それで還暦が過ぎてもう五年になろうとしています。

最近、宗教的な感性が強くなって、生きていることをすごく奇跡だと感じるようになりました。だって宇宙に生命はごくわずか、生物でも高等動物はごくわずか、特にその中でも知性があり、感情が豊かな人に生まれるという確率は奇跡的に少ないと思いますね、せつかく生まれてきてもあつという間に歳を取って、もう還暦を五年も過ぎ、残りわずかになってしまったということですから、後、一日一日を大切に生きなければ申し訳ないですよ。奇跡のような確率で自分を誕生させ、生きさせてくれている、父母や妻子をはじめ、友人知人、職場の人々、

受講生や読者、マイミクや天地自然のすべてに対して感謝して生きなければということです。

**佐々木**：ほお、私ももうすぐ還暦なので、その気持分からなくてもいいですね。でも石塚さんとの対談は、奇跡的なインスピレーションのことですよ。

**やすい**：フェティシズムというのはもともと始原的な信仰です。蛇や石などを神に指定して、それに願い事をして、聞き入れてくれたら供物を捧げて感謝し、聞き入れてくれなければ、その神を破壊するという信仰なのです。そんな迷信だということ、近代人はあまり高く評価しません、ところが石塚さんは、そこに人間中心のヒューマニズムを発見され、積極的な評価を与えたわけです。そういう人は極めて少ないわけで、その点石塚さんは奇跡的な人かもしれません。

**佐々木**：同じ論法でいけば、マルクスは、資本主義という文明の極致において、もつとも未開なフェティシズムが蔓延していると、非常にシャープな文明批評をしたわけです。

人間関係が物と物の関係に置き換えられ、物が社会的属性を持って社会関係を取り結んでいるように現れている。つまり商品・貨幣・資本が事物の社会的なあり方として現われ、価値関係をとり結んで人間のごとくふるまっている、これは一種のフェティシズムではないかということですね。

このマルクスの論法は大変鋭いわけですね。マルクス研究家

はたとえ剰余価値説には納得がいなくても、このフェティシズム論にはみんな心酔せざるを得なかったわけです。ところがやすいさんは事物が社会的属性を持つても倒錯じゃないと言われ、フェティシズムだというマルクスを批判された。それで興ざめなことをいうのでマルクス研究家からシカトされた。

ともかく剰余価値説をはじめ窮乏化説でも説得力がなくなつたマルクス経済学では、フェティシズム論だけは評判がよかったのに、それに疑問をなげかけたものだから、思い切り孤立したのでしょうか。そういう勇氣ある孤立を選んだのは奇跡だったというのではないですか。

**やすい**：細かい議論は、後でするとして、私の孤立は、フェティシズム論を批判して、事物が商品として価値を持つとしたことではなく、価値をつきものとしてマルクスが理解しているという価値ガレルテ論を唱えたからです。なんとマルクス自身がフェティシズムを批判するのにやはり未開信仰であるつきもの信仰に嵌っているというのですから、こりゃあひどい解釈だということになったのです。

**佐々木**：マルクスは科学的社会主義で弁証法的唯物論の教祖みたいな存在ですからね、その人がつきもの信仰というのは、とんでもないマルクスを冒瀆した名誉毀損的なレッテル貼りということでも反発されることも当然でしょうね。

**やすい**：ええ、ですから私も信じられなかったのです。ガレルテという膠を意味する言葉も比喩として理解していたのですが、

どうも違うのですね。単なる比喩じゃないのです。マルクスは事物それ自体に価値があるのではなくて、事物にとりついていいる抽象的人間労働の塊りが価値だということが言いたいのだ、それでガレルテ＝膠質物という表現を使ったということなのです。

佐々木：ここが価値解釈の最大の分かれ目ですが、やすいさんがおっしゃりたいのは、マルクスは事物には自然的属性と社会的属性があつて、社会的属性である価値が自然的属性と見誤れることがフェティシズムだということではないということでしょう。

そうではなくて、事物自体には社会的属性はないのだ、人間の社会関係が事物を包摂することで、事物にとりついていいるわけですね。価値は人間の労働を抽象化して労働時間に還元した社会関係ですが、それが生産物にとりついて、生産物に価値対象性を与えているということですね。だから生産物を価値と見なすこと自体が生産物を人間化して捉えるフェティシズムだというのがマルクスの価値理解だということですね。

やすい：ええ、ガレルテを凝固や凝結物と訳してしましますと、抽象的人間労働が、生産物の抽象的な社会的属性として価値に凝結したというように誤解されますね。そうすると生産物が価値存在だというのは倒錯ではないことになります。マルクスはそう理解することがフェティシズムだというためにガレルテという表現を使ったのです。

佐々木：話が出会いの奇跡からガレルテ論にずれていますが、ついでに突っ込みますと、いやそれは比喩だから、生産物の自然的属性だと価値をみなすのがフェティシズムという解釈でいいのだというマルクス研究者も多いわけでしょう。比喩か比喩でないかということになると水掛け論じゃないのですか。

やすい：ええ、現に水掛け論になっていきますね。実は私もそういう解釈だったのです。それだったら納得いきますからね。つまりそういう解釈は我田引水なのです。マルクスが自分の考え通りだったら、腑に落ちますから納得してしまいます。ガレルテも比喩で凝固の意味にだけとっておけばいいということになりますね。しかしそれでは価値をつきものとすることで展開している『資本論』の体系的方法を見落とすことになりません。

佐々木：ではやすいさんは比喩でないという論拠があるということですか。

やすい：第一章 商品 第四節 商品のフェティシユ的性格とその秘密」でマルクスはペーリーを批判しています。価値が物の属性であり、使用価値が人間の属性だとペーリーが言っているのを批判しているのです。つまり価値は商品という物が他の商品をどれだけ支配できるかという形＝交換価値で現れますから、物の属性で、使用価値というのは人間が物に見出す効用性だから人間の属性だという理解を批判しているわけです。

佐々木：つまりマルクスは価値は人間の労働の社会的性格であつて、物自体には属していない、「真珠やダイヤモンドの中に交

換価値を発見した化学者はまだ一人もない」と捉えていた、  
机が価値を持っていて、価値関係を結ぶとしたら、それは机が踊り出すようなものだということですね、机は人間じゃないから人間の社会関係である価値関係は結べないんだ、ところが現実には机は商品として扱われ、社会関係である価値関係を結んで、あたかも人間社会の中で踊っているように見えるから、資本主義は未開宗教に支配されてしまっているということですね。

**やすい**：そうなんです。それは人間労働の社会的性格である価値がつきものとして憑依しているからという論理なのです。ガレルテは価値がつきものとしての性格を表現しています。このような生物学的な用語は、十九世紀がダーウインの世紀、生物学の世紀であったこととつながっていますが、よく微妙な性格を表わすのに使われています。たとえば「蛹化」は貨幣の価値が金属という自然的性質に由来するような外観を呈するが、価値はそれに覆われた労働のガレルテなのだという意味ですね。資本の段階だと「骨化」という表現が使われます。

**佐々木**：資本の構成が機械や原材料などの不変資本が大部分になり、労働力に当たる可変資本の割合はほんの少しになってしまつて、外観的にはほとんど不変資本が生産して価値を生み出しているように見えるけれど、本当に価値を生み出しているのは労働力の労働だけであるということですね。つまり骨は大部分が石灰質の塊りで、細胞質の部分は少ししかないので、資本も骨化しているということですね。

**やすい**：そういうことです。だからガレルテも生物学的な用語

ですから、「蛹化」や「骨化」と同様単なる比喩ではなく、マルクスが理解している価値の性格を巧みに表現したものと捉える必要があるのです。ガレルテは膠だから付着しているというように。それに生産過程における価値移転論ですね。

**佐々木**：価値移転論も比喩だという解釈が有力なようですが。生産過程で生産手段を使って労働力が働いて生産物を製造するわけですが、その際、労働力は具体的有用労働で生産物の使用価値を作ります。同時に抽象的人間労働としては価値に凝結するわけです。八時間で生産物を一個製造するとしますと、八時間分は労働力の生んだ価値です。でも同時に生産物には原材料・燃料や機械などの消耗分に含まれていた価値も対象化されているわけです。価値移転論は、その分を不変資本の働きとして説明しては、労働力のみが価値を生むということになり、労働価値説が破綻するので、労働力の労働が不変資本の価値を移転させたとして解釈しているわけです。

**やすい**：ええ、それで移転させたのは具体的有用労働が抽象的人間労働かというのが論争になりました。マルクス自身は、抽象的人間労働は八時間なら八時間分の価値しか生めないのだから、生産過程で具体的有用労働で生産手段を生産物に変化させたことによつて、価値が移転したのだから、具体的有用労働が価値移転させたのだという説明です。

**佐々木**：その「価値移転」という表現がひっかかるわけですね。価値が生産手段から生産物に「移転」するということは価値が憑物だと捉えられていることではないかと、やすいさんは解釈

される。ところが憑物ではないとすると、具体的有用労働によって作られた生産物に不変資本の価値が移転したようにみなされるということになりますね。

**やすい**：それなら生産物の価値は、不変資本の分を八時間の具体的有用労働が生み出したことになってしまいませんか。不変資本は価値を生まないことを大前提にすればそうなっています。それこそフェティシズムなのでマルクスは困るわけです。だからマルクスはフェティシズム批判を貫徹するために、方法的に《つきもの信仰の論理》を用いているというのが私の解釈です。

**佐々木**：なるほど分かりました。ではマルクスをつきもの信仰だと断定してしまって、総スカンをマルクス研究者から食らってしまった。やすいさんの論理だと、機械が価値減耗した分は機械が価値を生み出したということになり、マルクスの立場からみれば、まさしく機械が労働して価値を生むフェティシズムですからね。これは孤立して当然です。まあ、そういうことを考え付くのも奇跡かもしれません、悪く言えばひねくれ者の極致かも。それを高く評価した石塚さんもやすいさんに劣らず面白いですね。

**やすい**：私のような解釈をすると定職に就けないのです。でも元々経済哲学というのもスペシャリストが少なく、大して職があるわけではありません。多数派に迎合した解釈をしても、インパクトに欠けて、なんのつながりも持たない私が、定職に就けるわけありません。それに迎合は哲学者として失格ですか

らね。それで自説をしつかり固めて、世に電撃的な衝撃を与え、その衝撃力で生きていく道も見つけようという戦略ですね。

**佐々木**：それが見事に失敗して、未だに定職に就けていませんね。

**やすい**：だから石塚さんとの出会いというのは大変奇跡的だということなのです。石塚さんもなかなか定職に就けなかった。それは彼が学界で評価されなかったり、排斥されたりしたからではなく、むしろ逆ですね、評価が高かったため、大物過ぎて採用されないというパターンだったのです。

**佐々木**：石塚さんを専任に入れると政治的な手腕がありそうだから、たちまち大学で実権を握ってしまうのではないかと警戒心ですか。

**やすい**：なにしろ身の丈より高くなるのじゃないですか、彼の著書と編著を積みますと。そんな人は滅多にいません。引く手数多の筈が不思議なことに五十歳ぐらいまで定職がなかったわけで、そこからは私の邪推ですが、政治的手腕を警戒されたのではないかということですね。

**佐々木**：その石塚さんは、やすいさんを高く評価されたということですが、フェティシズムをマルクスのように倒錯として斥けるだけでは駄目で、フェティシズムにもネガティブな面とポデティヴな面があつて、ポデティヴな面は大いに評価し、継承すべきだということで、そこはやすいさんの機械も労働し

ていると考えていいみたいだね、マルクスからみればもろフェティシズムな議論にも理解を示されているのですね。

**やすい**：そのへんの理解も微妙な温度差はあるかもしれませんが、彼が評価するポディティヴ・フェティシズムに含まれるでしょうね。ただ機械も時によつたら大変な環境破壊や人間疎外の元凶ですから、そういう場合は廃棄できるものでなければならぬ、機械を人間だと認めて、人間から切り離せないとなるとネガティヴ・フェティシズムだというのが石塚さんの議論です。

**佐々木**：やすいさんは核兵器こそ第二次世界大戦以降の人間の本質を構成するということで、ネガティヴな物も含めた人間を見つめ直すという構えですね。

**やすい**：ネガティヴな物を否定して人間から切り離す前に、それを含めた存在構造に人間は成りまわっているのだから、それを先ずは現実の人間の存在構造として捉え返し、その上で、自己否定的にネガティヴな部分を削ぎ落とした新しい人間を構想し、それに向けて自己変革しなければならないということですね。

**佐々木**：それで《自己疎外論の復権》の旗を振っておられるのですね。ネガティヴなものも含めた自己の疎外を捉え返して、その苦悩から自己否定的に自己変革を情熱的に追及しようというホット・ハートな疎外論を打ち出されているようですが。ともかくフェティシズムがある意味で肯定的に捉え返した二大フ

エティシストが惹かれ合つて奇跡の出会いをした。そこで奇跡の聖餐による復活論が飛び出したということですね。

### 1 聖餐による復活仮説の登場

**やすい**：聖餐による復活仮説は二つの構成要素からなります。

主に対談で問題になったのは、イエスの聖霊に対する信仰があつて、それを引き継ぐために弟子はイエスの肉と血を食べたのではないかということです。これは石塚さんのフェティシズムからアニミズムになつて、両者が融合しますと、霊能者の身体を後継者が食べることで霊能を引き継ぐということがあるわけです。これはつい最近までアフリカでは霊能者でもある王の心臓を燻製にして後継者が食べる儀礼があつたといわれています。

**佐々木**：それで石塚さんはイエスの血と肉を食べる聖餐儀礼はそうしたものの遺制ではないかという発言をされて、そこから儀礼だけでなく、実際にイエスの血と肉を弟子たちは食べたのではないかという議論に発展したわけですね。

**やすい**：そのあたりどのように議論したか対話篇を読んでみればつきりは分かりませんが、ただ石塚さんは聖餐はあつたと推測されておられますが、それがイエスの復活という共同幻想の原因になつて、イエスの復活信仰を核とする初期キリスト教団ができたというところまでは展開されなかった。この復活という第二要素は主に私の精神分析の結果です。

**佐々木**：ということは石塚さんは文化人類学的な未開信仰研究のフィールドの中にその遺制としてイエスの聖餐を位置付けておられるのに対して、やすいさんは、イエス復活の宗教心理学的メカニズムを説明して、キリスト教の起源を明確にし、宗教的和解の基礎を作ろうという問題意識ですね。

**やすい**：ええ、私の場合はそうですね。キリスト教徒以外の異教徒たちにとっては、イエスの復活など眉唾なわけです。言い換えれば、キリスト教という宗教は、ありもしないイエスの復活をでっち上げ、それを信仰すれば永遠の命が保証されると騙して立ち上げた嘘つき、インチキ宗教だと誤解しているわけですね。

ところが私の説ですとイエスは弟子に食べられたことで、弟子たちは神との合一を実感して強烈な全能幻想を抱き、その結果、復活のイエスを共同幻想として体験したことになりますから、少なくともキリスト教団を立ち上げた弟子たちには、嘘やインチキはなかったことになりました。相手をインチキ宗教と決め付けておいて、相互理解は成り立たないので、私の仮説は、それが当たっているかは別に、異教徒がキリスト教を理解し、キリスト教徒と和解する基礎になるといえることですね。

石塚さんの場合は、フェティシズムも単なる未開信仰ではなく、我々の生き方の問題ですから、死者を弔い、その霊能を引き継ぐために精神的だけでなくに肉体的にも合一するという儀礼の問題です。これは我々の毎日の食事ですね、これも命をいただいているわけで、イエスの肉を食べ、血を飲むような気持ち

で食事をするということです。そう捉えればボディティブ・フェティシズムですね。

**佐々木**：それで『フェティシズム論のブティック』以降のこととして「聖餐による復活」で二冊も書かれましたね、『キリスト教とカニバリズム』(三一書房、一九九九年刊)と『イエスは食べられて復活した』(社会評論社、二〇〇〇年刊)です。よほど評判になったので二冊書かれたのですか。

**やすい**：いや、そうではなくて三一書房の争議の影響で、『キリスト教とカニバリズム』がストライキで倉庫からでなくなっただけです。これには参りましたね、これは天地がひっくり返るような仰天仮説なので、爆発的に売れると私的には思っていたのです。それで石塚さんの紹介で社会評論社から、全く書き改めた「聖餐による復活」仮説のそのものずばり『イエスは食べられて復活した』を出してもらったのです。

**佐々木**：爆発的には売れなかったようですね。

**やすい**：ええ、増刷にはなっていないからね、いや、まったくすっごくですね。別に馬鹿売れを狙ったわけではないですが、『ダ・ヴィンチ・コード』みたいなイエスに妻子がいたかどうかのような、それこそ枝葉末節のことをテーマにしたのが、世界的に大ヒットして映画化されて大反響でしょう。それに比べてイエスが食べられて復活したのではないかという、それこそキリスト教の根幹に関わる仰天仮説が大して売れないというのは、どうなってるのかということですね。

**佐々木**：でも売れなくて却ってよかつたのじゃないですか、売られていればイエスの肉を食べ、血を啜ったカニバリズムが立ち上げた教団だとキリスト教を冒瀆したとして、キリスト教原理主義者から殺されていたかもしれませぬよ。

**やすい**：正直、ビビッて書いてましたからね。私の気持としては全く冒瀆する気はなくて、イエスの聖霊を引き継ぐ神聖な儀礼であり、自らの血と肉を与えてまで、永遠の命を証し、人類を救おうとしたイエス・キリストを賛美するつもりで書いたのですが、悪意に解釈されて、敵意を抱かれたら大変ですからね。

**佐々木**：それで梅原猛さんが『キリスト教とカニバリズム』の帯に「私は著者の勇気を高く評価したい」と言われたのですね。

**やすい**：まあ、あまりに仰天仮説なので、「トンデモ本」扱いでキリスト教会からは無視されましたし、そういう狂信的原理主義者からの脅かしやテロに遭わずにすんでいます。

**佐々木**：それじゃあ「聖餐による復活」仮説は空振りに終わったのですか。

**やすい**：いや、元々聖餐という教会の儀礼は、カニバリズムを連想させるものですから、私の説は表面的にはトンデモ仮説のように思われても、なるほどそれで納得という反応の読者が多いようです。上智大学の阿部仲麻呂という遣唐使のような名前のキリスト教の講師の方が、復活に関する大胆仮説として、

きちんとした学説として紹介されていますし、東洋大学でも柴田隆行さんが紹介してくれているそうです。

**佐々木**：「聖餐による復活」仮説は、福音書を精神分析の対象にした宗教心理学になっているわけですが、福音書自体の成立が何百年か後になるという解釈もあり、直接復活体験をした弟子の伝承として扱うのは無理があるということはないのですか。

**やすい**：それは現存する福音書の成立年代の議論ですが、その元になったものは、イエスの死後、イエス語録がアラム語で作られ、「マルコによる福音書」が書かれ、それらを定本にして「ルカによる福音書」「マタイによる福音書」が書かれたとされています。「マタイによる福音書」も断片はイエスの死後二・三十年の間に書かれたのが発見されたりしています。「ヨハネによる福音書」が新しく一世紀末ではないかということです。そこに初めて「聖餐による復活」説の根拠になる、イエスが自分の肉を食べ、血を飲む者を終末の日に復活させるという約束や、自分を命のパンとした説教が記載されたわけです。

**佐々木**：そんな後になって書かれたものは信憑性に欠けるのではないですか。

**やすい**：事が事ですからね、もしイエスを聖餐したことが露見しますと、イエスを神と認めていないユダヤ教からすれば、キリスト教徒はカニバリズムという最大の罪を犯したことになります。皆殺しにされてしまいます。だからあくまで聖餐の事実は伏せられていたのです。それを類推させるような「命のパンの教説」



も書けなかつたわけですね。ですからヨハネが最晩年になって書き遺すか口伝したわけです。

**佐々木**：しかしそういう文書も教会権力が贖罪信仰や復活信仰、再臨信仰などに都合よく編集したものでしょう、聖書としてはキリスト教がローマ帝国期に支配的になる四世紀に改竄された形でまとめられたので、現存する『新約聖書』の福音書を史的イエスの分析に使うのは、学問的ではないのではないですか。

**やすい**：そのような観点でイエスの原思想を追っていきますと、最終的にたどりつくのが、イエスの思想は、悪霊追放も、聖餐も贖罪も復活も二つの愛とも無縁な自足した思想であったり、イエスの伝承はエジプト神話の変形だったというイエス非實在説です。結局、彼らのイエス文献学の帰結は、贖罪の十字架も、復活体験もなかったという、それらは創作的な神話だということとで、キリスト教インチキ宗教論の焼き直しなのです。それを異教徒ではなく、キリスト教徒の研究者が自ら信念で唱えているところが違いますが。

**佐々木**：しかしたとえ神話であってもそこに語られている人類の贖罪をしたイエスを信仰することによって救われると言う発想は、全く架空の阿弥陀仏の慈悲で救われる発想と同じですから、宗教として立派に成立するのではないですか。その方がイエスの肉を食べ、血を飲んだというグロテスクな解釈をせずにするむでしょう。

**やすい**：近代における聖書学の合理主義的解釈は、福音書から

イエス復活の謎は分析できないということがいいのかもしれない。福音書を分析すれば聖餐による復活が浮かび上がりますが、キリスト教がカニバリズムによって成立したという結論になるのが潜在意識的に恐ろしいので、福音書を疑い始めたわけです。旧約聖書の焼き直しみたいな話は、借用として退けたり、悪霊追放など、呪術的オカルト的などは民間の俗信を取り入れて、粉飾したとして、イエスの言行から除外したりしたわけですね。

しまいに肝心の贖罪の十字架や復活まで、史料的裏づけに欠けるとして疑ってしまつたわけです。そうして史的イエスの原像は全く自足した修行者にすぎず、何ら命がけの信仰の対象になりえない人物ですね。そういう人間イエスを発見して悦に入っているわけです。

**佐々木**：その方が健全ではないですが、史実としては、イエスを人格化して、教会の権威を絶対化して、ローマ帝国の秩序再建を図つた、その過程で粉飾の塊りの聖書が作られたわけで、そういうものを全部清算して、人間らしい自然体の自足したイエス像に戻つた方がイエスの思いが甦るといえますし、そここそ真のイエス復活でしょう。

**やすい**：それは福音書の内容を心で読まずに、そこに書かれている宗教的真実に触れることなく、ただ政治的にイデオロギー支配の道具としてだけキリスト教の形成を解釈するからそうなるのです。

イエスの言行を伝えて、その宗教的な真実を伝えようとした信仰の書として読めば、そこに様々な粉飾や屈曲はあるものの、二つの愛によってトーラー(律法の呪縛を解き、聖霊の力で救済されるイエスの信仰が見えてきます。そして聖霊による悪霊追放のパフォーマンスで民衆の帰依をかちとり、急速にガリラヤ湖畔の「神の国」が肥大化したわけです。

しかしイエスに取り付いているのは聖霊ではなくて悪霊の親玉ベルゼブルだというファリサイ派のイエス攻撃が功を奏し、イエス教団は大衆的な支持を失い、「神の国」を維持できなくなりまし。それで真にイエスに帰依しているものだけを残そうということになり、イエスは「命のパン」の説教をしました。つまりイエスの肉を食べ、血を飲んだ者だけを終わりの日に復活させると約束したわけです。

**佐々木**：ユダヤ教ではカニバリズムは最大のタブーの一つですから、イエスを食べるといことは、もしイエスが神の子でなかったら、最大のタブーの侵害ですから、イエスを神、あるいは神の子と信仰していないで食べたなら永劫の地獄におちないといいけません。この教説を聴いても残留すると言うのは、イエスの聖餐を決意した者だけであるということですね。しかしイエスの聖餐は、イエスの肉や血をイエスの言葉の比喻として捉え、イエスの言葉を血肉化することが聖餐だという解釈で残留したとも取れますね。

**やすい**：確かに、イエスの存命中はイエスの言葉を血肉化することの比喻でいいわけですが、いよいよメシアの時がきて、贖

罪の十字架というパッション(受難)を迎えるとなると、ではイエスの聖霊をどう引き継ぐのかという問題に直面します。聖霊をつきものとして捉えていたイエスは、イエスの死後、その肉を食べ、血を飲めば、聖霊が引き継がれると解釈していたのです。それで最後の晩餐でパンとワインで聖餐のリハーサルをしたということですね。

**佐々木**：それで贖罪の十字架で絶命したイエスの遺体を墓に安置するとみせかけて、どこかに運んで、聖餐したということですね。食するとイエスの肉は消化されて排出されるけれど、そこに宿っていた聖霊は食べた弟子たちに継承されたということですね。聖霊の継承というのはシャーマニズムでは新しいシャーマンが古いシャーマンを食べる儀礼で行われるのですが、その場合は、新シャーマンがそのまま古いシャーマンの復活だということですね。ところがキリスト教では、弟子たちとしてでなく、そのまま死者の中から甦るわけですね。

**やすい**：ええ、ですからイエス自身、生身のまま復活するとはあまり期待していません。イエスの復活信仰は福音書に伝承されているところではアブラハム、イサクなどの族長が復活させられていると説いています。なぜなら神のことを「アブラハムの神、イサクの神、ヨセフの神」と呼んでいるからです。族長の守り神的性格が強かったのです。イエスの解釈では、もしアブラハム、イサク、ヨセフが存在しないのなら、そういう呼び方しても仕方ないので、彼らは甦らされて、現存しているのだというのです。そして高山に登ってモーセと話す場面もあります。これはブロッケン現象だと思われれます。し

かしいずれも生活者として復活しているというよりは、神の懷の中で生きているような感じですね。

**佐々木**：イエスはイエスの聖霊が弟子たちに引き継がれて、弟子たちが聖霊の力を發揮できるようになることを自分の復活と受け止めていたわけですね。しかし三日目の復活予告がありませんね。それと矛盾しませんか。

**やすい**：聖霊が弟子たちの体内で活動を始めるのが三日目ということですよ。三日目というのは金曜日最後の晩餐・処刑、土曜日の聖餐、日曜日の復活です。ですから聖餐から復活までは丸一日半ですね。

**佐々木**：暦が当時のユダヤでは夕方から一日が始まっているのでややこしいですね。日曜日の朝、まず墓地でマグダラのマリアに園丁として現われ、昼にエマオで親類のクレオパともう一人の弟子の前に旅人として現れ、晩餐に弟子たちのそろっているエルサレムで密室の中で現われたということですね。

**やすい**：今まで、この復活は神の行いだから宗教心理学的な分析の対象にされなかったわけですね。ですから復活なんて信じていない人は、作り話か、死んだと見せかけて、実は薬で仮死状態にしていたとかと説明してきたのです。

**佐々木**：墓地の園丁が復活したイエスだったという話ですが、はじめは別人の園丁に見えていたのに、園丁が「マリア」と呼んだ途端、復活のイエスだと分かったわけですね。

**やすい**：もし作り話で復活した話を作るとしたら、そんな設定にするでしょうか、作り話なら「墓地で天使にイエスは復活したという話を聞いた三人の婦人が弟子たちに知らせに行く途中に復活したイエスに会った」というようになりそうです。こういう作り話はたくさん作られたでしょう。でもはじめは別人の園丁だったのが「マリア」と呼んだので、復活のイエスだと分かったというのは、考え付きません。だからすぐリアリティがあるのです。

**佐々木**：エマオでも最初はイエスではなかったのに、パンを裂いて旅人が弟子たちに渡した時に急に旅人が復活のイエスだったと分かりますね、言われてみれば、これも設定が創作とは思えないですね。創作なら、クレオパたちがイエスを喪った哀しみにくれ、そしてマリアの復活体験をどう思うか語り合っているときに、復活のイエスがフツと現われるみたいに書きますよね。

**やすい**：当時はもちろん精神分析学がありませんので、精神分析にぴつたりの状況もなかなか思いつきません。その意味でイエスに関連したことをきっかけに強烈な全能幻想でイエスと園丁や旅人が同一視されたという話は、きわめてリアリティがあるのです。

**佐々木**：園丁が「マリア」と呼んだのは不自然ではありませんか。

**やすい**：マリアはイエスに対して非常に深い関係にありましたね。夫婦だったという説も有力です。イエスを喪った哀しみはひとしおでしょう。常にイエスがマリアの名を呼ぶ幻聴が聞こえていても不思議はありません。園丁と出会ったときに、園丁の声が「マリア」に聞こえることも当然あり得るわけです。そう呼ぶのはイエスですから、園丁がイエスと同一視されイエスに見えたわけです。

**佐々木**：そう見える仕組みが聖餐による全能幻想だということですね。でも聖餐すればそういう幻想が起こるかどうか、実証できますか。

**やすい**：実証できれば仮説ではありませんよ。聖霊が宿っているという確信の下で、我が身を食べさせ、血を飲ませる、弟子はイエスに聖霊が宿っていなければ永劫のゲヘナ(地獄)を覚悟で聖餐を行ったわけですから、そういうことを実験的に再現できません。歴史的に一回限りの極限的な実存なのです。だからこそ、そういう奇跡的な幻想が生じたということですね。

エマオの復活もパンを裂く場面から、最後の晩餐を連想し、さらには本当の聖餐体験がフラッシュバックして旅人がイエスに変わったということですね。

**佐々木**：エルサレムの弟子たちの前で復活は、弾圧を恐れて密かに密室に集まっていただけに、イエスが外から入ってきたとは考えられないので、余計に神秘的にとらわれていますね。

**やすい**：つまり聖餐に加わった弟子の一人が復活のイエスを無

意識に演じたということになります。

**佐々木**：それはイエスそっくりの弟ヤコブだったとやすいさんは推理されていますね。その後エルサレムの初期キリスト教団ではヤコブが中心になるようですからね。

**やすい**：ヤコブはイエス教団に加わって日が浅かったのですが、イエスが実兄ということもあり、同一視する傾向は強かったと思いますから、聖餐によって聖霊が入ったと思いつくことで、兄のようになりたいという願望が実現してしまい、イエスに人格的にジャックされたのです。もちろんこうした二重人格症状は、そこから回復すれば、イエスになっていたことは忘れていきます。晩餐によって聖餐がフラッシュバックした中で、イエスそっくりのヤコブがみんなからはイエスの復活に見え、その視線の中で、ヤコブも自身を復活のイエスと思いついたということです。

**佐々木**：この弟ヤコブが実在したことは歴史的に確からしいので、イエスの実在も傍証されるようですね。

**やすい**：イエス非実在説でいけば、弟ヤコブやペトロたちでエジプト神話からイエス像をでっちあげたことになるのでしよう。しかし福音書ではイエスの宗教的真実を伝えたいという思いがありますから、作り事とは考えられない体験がたくさん混じっているわけです。

**佐々木**：イエスを聖餐し、「イエスの復活」を見たという生々し

い体験抜きに、初期キリスト教団の死を恐れない布教は説明できない、またはげしいパウロたちユダヤ教徒やローマ帝国の迫害にも、決して暴力で抵抗しないで、愛を返したということも説明できないということでしょう。それを現代人がどうして神話や創作だったことにしてしまうのか、それではイエスの真実から学べないぞとやすいさんは言われるのですね。

**やすい**：ユダヤ教の伝統では、超越神ですから、人間が神とみなされるようなことはとんでもない渾神です。ところがイエスは、聖霊を宿したというだけでなく、彼自身が神が地上に現われた姿だと信仰されるようになります。これはイエスの神格化によって、教会の権威の絶対化を図ったと解釈されます。

そういう面もあったでしょうが、それが説得力を持ったのは、どうしてでしょう。イエスがただ世のため人のために生きて、人々の罪を背負って犠牲になっただけでは説明がつきません。そういう聖者はいくらでもいます。ただの人間とは考えられないような、自らの肉を食べさせ、血を飲ませてまで、聖霊を与えようとした、驚愕のパフォーマンスに圧倒されたからこそ、イエスという人間が神だというユダヤ教からみればとんでもない恐ろしいことですが、神を冒瀆すると受け止められるような教義が定着してしまっただけです。

**佐々木**：つまりやすいさんは、信じがたい奇跡的な、驚愕すべきこともしていないのに、キリスト教が誕生したなんて説明はおかしいといたいわけですね。

**やすい**：教会権力やローマ帝国の権力の都合からだけ説明していたら、宗教という人間の魂の震えは説明できないということ。もちろん私の解釈も精神分析すればこう説明できるというだけで、実証できたと断定しているわけではありませんが、宗教的理解、宗教間の和解につながるのではないかということ。

## 2 「西田哲学入門講座」

**佐々木**：あまりに迫力がありすぎて「聖餐による復活」説の説明が長くなったのですが、同時期に、『状況と主体』一九九八年十月号から二年一月号に「西田哲学入門講座」を連載されましたね、これはなかなか評判がいいようですね。

**やすい**：佐々木さんに褒められても、客観的な評価とはみなされないでしょうが、西田哲学だけでなく、哲学に関心を持たれている方は是非読んでいただきたいですね。類書の中でも一番分かりやすいものじゃないでしょうか。出版事情が悪いので、補助金がでないとなかなか出版社は引き受けてくれませんが、単行本にできなかったのですが、PDF版の『やすいゆたか著作集 第七巻』に収録できて、まとまった形で読んでいただけるようになり、よかったです。

<http://www.w42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/nishidanyumon.pdf>

それに文体が途中から対話篇になっていて、統一がとれていないので未完成ですね。このままでは出版社はつかないでしょう。そのうちどちらかに全面的に書き直そうと思っています。

**佐々木**：だったら、後ろの方の対話が面白いので、全部対話にされたらいかがでしょう。でも西洋の経験論の歴史から純粹経験を説き起こすのを対話にするのは難しいかもしれませんね。あの導入はよかったです。純粹経験というのはどうも禅とのからみで理解しようとするから、概念的にうまく説明できなかったのですが、経験論との発展として、また合理論との比較から捉え返すと、近代哲学史をおさらいしながら、純粹経験というキーワードがつかめますからね。

ところでやすいさんはどうして西田哲学に惹かれるようになったのですか。

**やすい**：専門が経済哲学だったのですが、私の恩師が梯明秀先生で、一九七〇年代の初頭に教わったのですが、梯経済哲学といえはなかなか難解だったのです。その原因は西田哲学によってマルクス経済学の哲学的基礎づけを行われていたからなのです。それで学生時代から梯経済哲学を理解するために西田哲学を勉強したのですが、なかなか分かったというところまでいってませんでした。

**佐々木**：それが「西田哲学入門講座」は高校生にも西田哲学を分かるように解説するというふれこみで始めたのでしょうか。

**やすい**：ええ、予備校の倫理や高校でも倫理を教えていましたので、高校生にも分かるように説明しようという心意気で書いていましたが、何しろ読めば読むほど分かりにくさが増してく

るところがありました、まさしく悪戦苦闘でした。

**佐々木**：本人の文章だけでは分かりづらいところは解説書でカバーされたのですか。

**やすい**：なかなかきちんと解説しているものは少ないですね。一番参考になったのは柳田謙十郎の『西田哲学体系全三冊』（大東出版、昭和21年）です。彼は戦後暫くしてから西田哲学から転向してマルクス主義者になり、共産党の啓蒙的な哲学者になりました。彼は自分が教条的に信奉している人の哲学を解説するのは上手なのですが、自分の問題意識でクリエイティブに展開するのは苦手なようです。

**佐々木**：やすいさんは、廣松渉を批判されていた頃には、主観・客観認識図式を超えるような事的世界観を批判されておられたようですが、西田幾多郎は主客未分の純粹経験を唯一実在として哲学しているわけですから、その西田哲学に傾倒されるというのは矛盾していませんか、いかなる心境の変化かと思いますが。

**やすい**：『やすいゆたか著作集 第十四巻 《廣松渉》論集』  
<http://www.42.tok2.com/home/yasuyutaka/shoto/hitromatsu.pdf>  
を参照してください。まさか《廣松渉》論集で一冊にまとめて世に問えるようになるとは思いませんでした。出版社だとなかなか引き受けませんか、WEB文化のおかげです。廣松シユレ（学派）に属さないで廣松論で一冊まとめたのは私だけではないでしょうか。

私は二十歳代の頃から廣松批判を始めていまして、最初は事的世界観に物的世界観で対抗しようと考えていました。でも世界は物の集合というようにも、事の連関というようにも捉えられる、両面をもっているわけです。

廣松は「物」を実体ではなく、事の契機に過ぎないとし、物それ自体が存在していると捉えるのは倒錯(とくさく)だと批判しています。それで世界は事の連関だという事的世界観を唱えたわけです。その際、事は主観から独立した客観的実在ではなく、主客未分の廣松の表現では四肢構造になっているということです。

ともかく事の連関として捉え返すことも必要だということは、廣松批判をしながらよく分かったわけです。でもその事を認識するということは、それを物と物の関係として把握することには他ならないわけです。事は物の関係としてしか意識に現われなないならば、やはり世界は物の集まりという面も持っているわけですし、物的世界観を倒錯視するのは間違っている。物的世界観と事的世界観の弁証法的統一として世界を把握すべきだということです。

**佐々木**：物の実体性を批判するというのは、仏教にも通じているのではないですか、やすいさんの場合、物の実体性は認めておられるのですか。

**やすい**：そりゃあ、物を個として他の切り離して、それ自体で

存在すると考えて、そういうものを実体と呼ぶなら、物を実体視するのは倒錯です。物是对立物との関係で存在し、对立物の闘争、統一として捉えられるというのが弁証法的な物概念です。

その際、物は互いに相手の根拠に成り合っているという意味で、下に立つという Substanz (実体の原義に叶っているので、デカルト的な形而上学的な実体ではなく、弁証法的な実体としては認めてもいいと思います。実体や実在という哲学の基本的なターム(用語をいとも簡単に古臭いみたいに捨ててしまう流行哲学者がいますが、それは哲学を貧弱にするだけだと思いませんね。

ただ仏教の場合は、宗教的な覚りとして、物を仮の物として捉え、物を超越した法と一体化しようとするわけですから、その意味で物の自性(実体性)を否定するのは宗教的な覚りとして凄いと思いますね。ただ現実の世界認識では実体という言葉は捨てることはないという立場です。

**佐々木**：西田哲学では純粹経験が唯一實在だということで、物の実体性は否定しているのでしょうか。

**やすい**：純粹経験の立場ではそうですね。ただ場所の論理に発展しますと、有の場所、無の場所、絶対無の場所がありまして、事物認識は世界を事物の関係として捉える有の場所では実体的に捉えられます。ところが事物も感覚の束であるという意識の立場では、実体性は否定されるわけですね。

**佐々木**：弁証法という言葉も一九七〇年代以降は、あまり聴かれなくなつてませんか、何か二元論的発想のようにとられ、二元論では世界は説明できないから弁証法は駄目だといわれるようですが。

**やすい**：もちろん二元論で割り切るといふのはとんでもない話で、世界はそんなに単純じゃないですよ。たしかに弁証法を二元的に説き過ぎた面があつて、大いに反省は必要です。

でも二元的に説明しているのは便宜的に単純化して分かりやすくするためです。中国思想でも陰陽の二元論が強くて、物事を単純化しすぎるので、五行説を加味しますね。実際の世界は多面的ですが、その世界を説明したり、変革したりする場合には、いくつかの要素の関係として単純化して捉え返す必要があります。時に二元的に割り切つて捉えなければ決断できないことが多いわけです。

**佐々木**：やすいさんは弁証法は二元論だけじゃないというけれど、実際には、ほとんど二元論で説かれているので、弁証法の評判が悪くなつたのではないですか。

**やすい**：二元論が有力なのは、実際に二元論的に行動することが多いからです。政局などを見てみると、どちらかにつかなければいけない場面が多いですよ。鳩山さんは昨日まで菅さん再選でいくと言つていたのに、今日は小沢さんに大義ありみたいに言い出す。でも今は鳩山さんは二元論的発想をやめて、派内の結束を固め、第三極を作つて、両者を牽制すべきかもし

れません。

**佐々木**：つまり孔明の「天下三分の計」も一種の弁証法だということですね。

**やすい**：ええ、今言つた五行説もあれば、仏教では三体円融説があります。弁証法というのは、事態に即してそれをダイナミック(力動的)に幾つかの要素の働きかけあいとして説明するものです。だから、いわゆる弁証法を定式化された法則に還元してしまつてはいけません。

**佐々木**：対立物の統一、対立物の闘争、相互浸透、量的変化の質的变化への移行などですね。

すっかり西田哲学から話がずれてしまつたので、話を西田哲学に戻さなくては、もっとも『西田哲学入門講座』について全部議論していくとまた膨大になつてしまいますので、やすいさんの問題意識とからめてお話願います。特に新しい人間観、最近の用語では「ネオヒューマニズム」との関わりですね。先ず純粹経験ですが、これを高校生にも分かるように説明したらどうなりますか。

**やすい**：経験を語れと言われますと、何時どこで誰が何をどうしたみたいなの、五W一Hで語ろうとしますね、そのような反省を加えて、主体、客体、時刻、場所などの説明ばかりしても、生の純粹な経験は語れません。そういう反省を加える前の生の経験が純粹経験です。たとえばリンゴの絵を描いている時、描



いているのは私だということを意識し過ぎるとだめですね、私はたくさんやることがあったり、問題を抱えたりしていて、そういう私を気にしていたら、対象のりんごに集中できません。我を忘れてりんごだけに集中して描かないとだめです。また対象のリングという物の観念に囚われても駄目ですね。対象はりんごだと言うことに拘るとリングとはどうゆう物かという先入見に囚われすぎて、リングの概念から対象を見てしまいます。するとリングに対する先入見で生のリングは歪められて描かれてしまい、本当に今、ここにある経験としてのリングは捉えられなくなってしまう。そういう先入見やリングに関する固定観念に囚われずに、そのままのリングを見ると、くつきりと命の輝きが迫ってくるのです。そのとき純粹経験しているのです。

**佐々木**：その説明じゃピンとこないでしょう。私が高校生に倫理で純粹経験を説明するときは、我を忘れて夢中になっていた体験を語ってもらって、それから私の純粹経験という短文を書かせます。そして大抵部活がむしやらに練習したり、何も考えず、ひたすら球に向かって思い切りバットを振り切ったらヒットだったみたいなのが多いですね。

**やすい**：そうですね。あまり純粹経験とは何かの理窟を説きすぎても難しくなるばかりなので、満開のさくらに我を忘れたとか、部活で汗だくで練習した後、飲んだ水が凄くおいしく感じたとか、生き活きた生命の躍動がある体験ならなんでもいいんです。西田は、そういうホットな輝いている経験が大切なんだ、純粹経験に生きることが善なのだといったいわけなんです。

**佐々木**：では純粹経験とやすいさんの事物や環境や組織体を含めての人間観、ネオヒューマニズムとの関連はどうなのですか。

**やすい**：大変共鳴するところがあると思います。純粹経験としては、主観・客観が未分化なピュア（純粹）な意識だということですから、ネオヒューマニズム的な人間観を実感しようと思えば、純粹経験に戻ればいいということになります。

**佐々木**：事物を含めて人間だというのは、既成の人間観が身体やそこに宿る人格だけを人間と考えてきたことに対する反省として、非常に高度な認識ですよ、それじゃあ純粹経験とはいえないのじゃないですか。

**やすい**：いや、『善の研究』では、純粹経験は唯一実在つまり原理（アルケー）ですね。ですから主・客未分と言っていないながら、すべての意識がその意識に即する限り、純粹経験となっていて、ヘーゲル哲学みたいに感性から理性へ変化発展するといふわけではありませぬ。

主・客分裂から自覚に達し、対象を自己自身として意識した意識も純粹経験なのです。ちなみに西田は自己意識を自覚と表現します。

**佐々木**：ということは、自己意識＝自覚の段階では、事物や環境や組織体や国家、あるいは世界も含めていいかもしれませんが、それらがすべて自己の意識状態として受け止められるので、

主体と客体、自己と他者といった垣根がなくなり、ありありと対象が迫ってくるということでしょうか。

**やすい**：たとえば夏の夜空を眺めていて、満天の星が輝いていても、自分は自分で、自分は輝く星ではないということに拘っていませんと、自分が抱えている様々な心配事や利害関心が次々頭をもたげてきて、星の輝きに見とれていられなくなるでしょう。

**佐々木**：やすいさんがよく例に挙げるのが空海の名前で、「空をみれば空、海をみれば海」が自分だと室戸の洞窟から見感じたので「空海」と名乗ったという話に通じていますね。

ところで西田はフッサールの現象学の用語も使っていますね。意識経験をノエシス（作用面）・ノエマ（対象面）で説明しています。つまり意識を形成して統合する意識の作用と、それによって形成された対象の像が対応する事物を表現する面です。その場合フッサールの現象学だと、ノエマはあくまで意識経験の像であって、客観的実在を正しく指し示しているかどうかはエポケー（判断停止）しなければならぬと考えます。

ところが西田の場合は、意識経験がそれ自身として唯一実在であり、事物は意識経験のノエマだけのこして、ノエシスを捨象したものとされていますね。ということは、事物は意識経験の統一性だということになり、客観的実在は残りません。

**やすい**：ええ、フッサールの現象学は意識経験の学なのですが、

その意識と実在は区別されています。それに対して西田は意識現象が即実在だという現象即実在論に含まれるといえるでしょう。だから空や海や薔薇やパソコンが自分だ、人間だといってもいいことになるわけです。

**佐々木**：そうしますと、私の方、主体が無になってしまって、対象だけがある、それがどうして対象ではなくて、自分だということになるのですか。

**やすい**：ですから、既成の人間だと人間は身体とそこに宿る人格に限定してしまつて、対象は人間ではないということになります。大自然も社会的事物も人間ではない、だから対象のことに没入していると自分がなくなつたみたいに思うのです。しかし純粹経験として捉えればどうでしょう。西田はすべて意識は純粹経験の連続だといえます。そしてそれが自分の意識であり、自分の真の実在だということですね。そうしますと、純粹経験としての星空や風や太陽、きれいな水や鳥の鳴き声こそが自分だということになります。

それに純粹経験というのはありありと対象を統一する意識ですから、意識に方向性があり、この統一性が意志なのです。意志をノエマ化して実体的に捉え返されたのが人格だということですね。

**佐々木**：ともかく純粹経験ではすべての対象が自分自身の意識だということ、その状態がそのまま人間概念が拡張された事物も人間に取り込んだ状態だということ、つまり即自的にネ

オヒューマニズムだということですね。それを自覚として、主客の分裂を克服した意識で捉えますと、対自的にネオヒューマニズムになるということですね。西田的にはそれも純粹経験だということですね。やすいさんの場合も同じですか。

**やすい**：ええ、そこは納得ですね。よく「やすいさんは社会的事物を含めて人間だと言われるけれど、本当にビルディングやパソコンや衣服が人間に見えているのか、ビルディングはビルディングにしか見えないだろう」と言われるのです。

**佐々木**：キリスト教の聖餐式で「パンはパンのままではあり、ワインはワインのままではあり、イエスの血である」というのはおかしいだろうというのと似てますね。

**やすい**：超越神論に立てば、確かにパンはイエスの肉ではあり得ませんね、でも教会が地上におけるイエスの体であるという教義を立てれば、教会の中ではパンはイエスの肉という理屈になります。しかし、家庭が地上におけるイエスの体という教義を立てれば、家庭でもパンをイエスとして食べることができることになりますね。それでは教会の特権や支配力がなくなるので、そういう教義は立てないのです。

ビルディングが人間に見えない人は人間を身体に限定しているからです。ビルディングなど人間が作り出した物こそ人間の姿なのだ考えていると、ウワー人間はなんて馬鹿デッカイ存在だと思えます。核兵器や核実験を見ますと人間はなんて空恐ろしいと思えますしね。まさしくビルディングや核兵器に人間を

見ているわけです。

**佐々木**：「純粹経験論」や「やすい人間論」みたいな、自己と他者、人間と人間以外のものを区別しない理論というのは、まず主体がなくなってしまうのじゃないかと思われるし、なんでも純粹経験、なんでも人間になってしまっても何も言っていないのと同じじゃないかと反発されるでしょう。

**やすい**：デカルト的な、永遠不滅の精神的実体として魂があつて、それが考えたり、意志をもつて行動するということにはなりません、各個人には人格的主体がありますし、それぞれの事物にも他の事物や人格に一定の方向性をもつて働きかけていますので、意志を体現していると言えます。

なんでも純粹経験、なんでも人間といっても饅頭がアイスクリームになるわけじゃないし、猫が犬に変わるわけではありません。存在のあり方が純粹経験であり、人間だということですね。

**佐々木**：禅でも、坐禅して瞑想状態にあるのがそのまま覚りだといえますね。「修証一等」ですか。でもいつも坐禅ばかりしてられないので、日常の仕事や商売、立ち居振る舞いまで全部禅だというじゃないですか、そこから臨済宗は素晴らしい日本文化を生み出したといわれますね。精進料理、茶道、華道、能楽、俳諧、小笠原流行儀作法、畳・ふすま・床の間の書院造りの日本家屋などです。これらもすべては純粹経験なんだというように西田に教えているのじゃないでしょうか。

**やすい**：それは天台本覚思想にもいえますね。煩惱即菩提、言  
い換えれば煩惱即涅槃ということ。生きるということは欲  
望を充足させることでもありません。欲望をうまくコントロー  
ルできないとそこに苦が生じますが、なかなかコントロールで  
きない欲望を抱えて生きなければなりません。西田は甘党で饅  
頭に弱かった、つい知らない間に客に出した饅頭まで食ってい  
たり、食いすぎて腹を壊して自己嫌悪に陥り、それで坐禅に打  
ち込んであさましい煩惱に打ち克つととしていたようです。

**佐々木**：八、八、八、そりや面白いですね、西田幾多郎とい  
えば大哲学者で、さぞかし高遠な真理を求めて坐禅をしていた  
と思われるところが、饅頭に悩んでいたとは、すごくいい人で  
すね。饅頭で下痢して惨めな気持というのも、これもやはり純  
粋経験でしょうね。それを純粹経験だと受け止められたら煩惱  
がそのまま覚りということでしょう。

ところでジェームズが確か「純粹経験」を唱えていたわけ  
ですが、西田の場合とは違うのですか。

**やすい**：ジェームズの根本的経験論では個人の意識経験の流れ  
を純粹経験と考えているようにも解釈できますが、西田哲学で  
は純粹経験というのは、単なる個人的な経験ではないのです。  
個人が経験するのではなく、経験があつて、その経験を反省す  
れば、個人や事物が経験の解釈としてでてくるわけです。その  
経験は大いなる生命の流れであつて、個人経験もその現われに  
すぎないわけです。

**佐々木**：個人があつて経験があるのではなく、経験があつて個  
人がある」というのは、倉田百三の『愛と認識との出発』です  
ね。倉田はその文章を読んで、感極まったのでしよう。それま  
での独我論を脱することができたということですね。

デカルトが「考える我」をすべての出発点に置いたわけだ  
ね。それを読んだ近代日本の若者たちは、信じられるのは我だ  
けだということで、独我論的なエゴイズムになってしまった。  
ところが日本人は元々共同体的なところがあつて、家族や友人  
の愛に餓えている、そこに西田の「**個人あつて経験があるの  
ではなく、経験があつて個人がある**」という言葉で救われたとい  
うことですね。日本の近代知識人が西洋コンプレックスから独我  
論に奔っていたのが、共同体的なものに還帰することができた  
わけですね。

**やすい**：そうですね、その共同体的なものというのが、戦前だ  
と国家主義にからめとられやすかつたのですが、西田のように  
仏教の唯識論的な背景があつて言っているとすれば、全人類や  
大いなる生命の経験の現われとも言えるわけですね。

**佐々木**：純粹経験から、自覚へ、そして絶対自由意志の哲学へ  
と転回していきますが、それは個人主義への転回ではないので  
しよう。

**やすい**：ええ、デカルトのように意識する主体があつて意識す  
るのではないのです。それだつたら意志の主体があつて、主体  
の側に意志が存在することになります。そうではなくて、主体

も客体も意識経験から反省されて仮構されたものだということですから、意志も意識以前に主体の中に存在するとは考えないのです。

**佐々木**：経験を離れて意志はないということは、経験自身が示す傾向性が意志だということですね。その経験が大いなる生命の経験ともとれるわけですから、意志も物事を根底的に有らしめている一般者、やすいさんの用語では「大いなる生命」の意志だともいえるのですね。だから絶対自由意志は、個人が勝手気ままになんでもやりたいことをやるということではないのですね。

**やすい**：もちろん一般者の意志は、何ものにも囚われない意識に成らないと、個人の意識として様々にゆがんだ形になってしまいますので、臨済禅師のいうように、覺りに邪魔な者はみな殺す覺悟がなければならぬということですね。仏でも、宗派の教祖でも、羅漢でも、親でも眷属でも皆殺せということです。それは自分の中にある親や師や仏ですから、自己否定なんですね。

**佐々木**：まさしく親の教えとか師の教えが囚われになって覺れない場合は、それを克服しなければならぬ。それは今までの自分を殺して、新しい自分に生まれ変わることでいいですね。また親や師を殺して得た教えというものは、大変危険な教えとして排斥され、自分の命も危うくなるかもしれないという意味で、哲学することは、本気でやれば命がけだよということですね。やすいさんの人間論も命がけみたいなことがありましたか。

**やすい**：仕事というものはとことんこだわっていけば、命がけになってくるものではないでしょうか、哲学だって例外じゃないということですよ。佐々木さんも高校の教師を長くされていて、自分の教育上の信念を貫こうとすれば、生徒とも同僚や教祖とも、校長とも、教育委員会ともぶつかって心身ともにぼろぼろになってしまおうという体験がおありでしょう。

**佐々木**：別に信念を貫かなくても、普通に教師していても、命がけに近いことがありますね。

**やすい**：オリジナリティが強すぎると、他人からはハチャメチャな暴論にしかみえませんが、発表してもシカトされてしまいがちですね。まあ、でもそれなりに評価してくれる人も居て、おかげで何とか非常勤講師で食いつないできましたが、これも命とつながりがある意味生活という意味ですから、命がけですね。昔みたいに異端すぎるというって犯罪視されることは、ないでしょうが、ただ宗教論などはリアクションが恐いので、「聖餐による復活論」などは若いときには発表できなかったと思います。

**佐々木**：西田幾多郎の哲学は、絶対自由意志から場所の論理に大きく遷回しますね。場所の論理というのがなかなか難解ですが、それを咀嚼して、自分の哲学に取り込むというようなことはできたのですか。

**やすい**：いやあ、ほとんどできていないでしょうね、もちろん学ぶところは大きいにありましたよ。自覚を徹底して、世界を自

己の根底的な意志の現われとして捉え返す絶対自由意志に到達しますが、しかし彼は大きな挫折に見舞われます。

**佐々木**：世界を意志の現われとして展開しているのに、彼の人生はかえって悲哀の連続で、まるで神に試されているような家族的な不幸が連続するわけですね。

**やすい**：「絶対自由意志」から「場所」への転換は『働くものから見るものへ』というタイトルに表現されていますが、もちろん意志も場所も意識経験に関して言われていることとして、意識経験と別に意志や場所があるわけではありません。意識経験の中に統一する働きを意志として捉え、意識経験がそこで生じ、意識経験を包み込んでいる意識経験自身の包容性を場所となづけたのです。

**佐々木**：やすいさんの解説を読みます。

「しかし世界を働くものとしての意志が獲得するには、意識経験として現れる内容を自己自身として素直に受容しなければなりません。意識の統一は意志が行っているにしても、意識の内容を個別的な意志が恣意的に決定できるわけではありませんから。その為には、自己の内容を自己自身の内に映し出すところの「見るもの」の立場に立つ必要があるのです。これが意識経験がそこに於いて現れ出る「場所」に他なりません。」

何度も読み返して理解しようとするのですが、なかなかストンとこないのです。これがさっき言われた家族の不幸の連続ですね。これも不幸は意志しなくてもやってきます、その意味で

作るのではなく、見る立場でなければ受け止められないということですか。

**やすい**：もちろん手を拱いて何もしないということではないけれど、己の不幸にじっと耐えて、心の底から自己を見つめるところに「悲哀の哲学」が生まれるわけですね。

「我が心深き底あり、喜も憂の波もとどかじと思ふ」と歌っています。

**佐々木**：それからフランス文化と東洋文化を比較した次の西田の名文があります。

「形相を有となし形成を善となす泰西文化の絢爛たる発展には、尚ぶべきもの、学ぶべきものの許多なるは云ふまでもないが、幾千年來我等の祖先を孚み来つた東洋文化の根底には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くと云つた様なものが潜んで居るのではなからうか。我々の心は此の如きものを求めて已まない、私ばかり要求に哲学的根拠を与えてみたいと思ふのである。」（全集第四巻6頁）

フランス文化は、意志が自ら作り上げた理念や形を、壮大な近代建築や近代工業、あるいは様々な芸術作品として作り上げてきたわけですね。これも素晴らしいけれど、東洋には自然を加工して何か物質的な文明を作り上げるのではなくて、自然と融合して、その中にある素晴らしいものを感じ取る感性があるということですね。フランス文化は「作る」文化、つまり意志の文化だが、東洋文化は「見る」文化、つまり場所の文化だ

ということですね。

**やすい**：私も元々は西欧的な発想で、世の中をキャンパスにして大活躍し、素晴らしい世界を作り上げようと思っていました。今でもそう思っています。

でも実際にはそう簡単には動けませんね。笛吹けど踊らずで、挫折の繰り返しです。ですからじっくり眺めて、世間をよく知り、そこからのいいものをたくさん学んで、通用する人間になつてということ、作るより見る方が実際にはほとんどになっています。そして作る立場ばかりでは、よく見ることができないし、じっと見ることで人生もいいものをいろいろ味わえるわけですね。そうしてこそ本当にいいものを作れるということでしょう。

**佐々木**：やすいさんの立場から言えば、意志と場所も何か、意識経験の外に人格や対象的事物があつて、人格や対象的諸事物が働きかけあつて意識経験が生まれるという捉え方ではなくつて、意識経験それ自体の方向性として意志があり、ノエマの実体視が事物であり、意識経験が自己の根底から自己を生み出しているという、すべて意識経験の学に徹しているところが参考になつたのじゃないですか。

**やすい**：意識経験を人間として捉えれば、事物も含めた人間観になりますからね。実際、カントでも認識できるのは意識現象だけなので、カント哲学は意識現象を人間として捉えれば、カント哲学は広義の人間学だといえますし、西田幾多郎も哲学は

人間学だと言っています。純粹経験も自覚も絶対自由意志も場所も絶対無も行為的直観も絶対矛盾的自己同一も人間のあり方ですからね。

**佐々木**：場所の論理では、物理的な事物間の関係として捉えられる場所を「有の場所」とし、ここでは事物は、先ずAという事物があつて、それが様々に述語付けられて認識が豊かになる主語論理で捉えられます。

次にAが $\sim a, b, c, d, \dots, \sim$ という述語の集合でしかないということになりますと、述語は感覚による規定なので、Aは意識の野に置かれたことになり、「無の場所」が展開するので、Aは述語の総括ですから述語論理ですね。

この述語論理とやすい人間学は連動しませんか。だって既成の人間学だと、人間は身体やそこに宿る人格に限定されていますから、いわば主語の論理で身体的人格の振る舞いや特性として人間が規定されてきたわけですね。ところがやすい人間学だと、人間と交渉している社会的諸事物や環境的自然が、人間の述語として人間を示していく、その総括として人間が説明されるわけでしょう。

**やすい**：なるほど、説得力がありますね。そういうアプローチでいくとますます西田哲学にはまりそうですね。

**佐々木**：ところで、 $a, b, c, d, \dots$ のそれぞれがAであるということになり、 $a, b, c, d, \dots$ のそれぞれが述語面を超越します。これが超越的述語面と呼ばれて、意識の野「無の

場所」にもいないのです。それで「絶対無の場所」を設定するわけです。どうもここまでくると理解に窮します。

**やすい**：おそらく事物の有に対して、それと対立的に意識を無としますと、事物が意識経験のノエシスを捨象したノエマでしかなかったことを踏まえているのでしょうか。そして「意識の野」は主語的な事物を述語付ける意識だったのが、そういう事物をノエマ面として自己に取り込んだ意識として捉え返されているので、超越的述語面と言われるわけです。

**佐々木**：それなら事物が有で、事物についての意識が無、事物でもある意識が有でもない、無でもない絶対無だということになりますね。

**やすい**：対立的な無である意識の野を破った超越的述語面を、西田は「絶対無の場所」としました。そこにおいては意識は、自己自身を無にして、個物Aを自己自身として自己自身の中に写して直観しているわけです。

個物Aが自己自身ですから、「Aは{a・b・c・d}」である」という認識は、A自身の認識でもあるわけです。西田の「物」となって見、物となって考える」というのは、こういう意味です。

その純粹経験は、ノエマ・ノエシスの統合であるとともに、そういう純粹経験を生み出す働きとして、それ自体は存在の根源として何ものにも制約されない、規定されていないと言う意

味で、具体的な有無を超えたと言う意味で絶対無と表現されたのでしょうか。ですから「絶対無の場所」と言う場合、「絶対無である場所」を意味しているのでしょうか。

**佐々木**：物となって見、物となって考える」で、人間が考えるということが、物が考えられるということなのだということが帰結されていて、これはマルクスの『資本論』では「机が踊りだす」というようなフェティシズムになりますね。事物と意識を二元論で捉えないとすれば、事物それ自体が意識であるのですから、人間の意識は物の意識で、人間が考えられることは、物が考えられるということと言えますね。

**やすい**：本居宣長の「もののおはれ」は物が感じるということですが、まあ同じ論理ですね。欧米では、フェティシズムは幼稚な原始的な倒錯のように扱われがちですが、フェティシズムの王国である日本には天台本覚思想や本居宣長や西田幾多郎といったゆたかな思想的伝統があるわけです。

**佐々木**：これは初歩的な誤解ですが、場所というのはそれ自身意識経験なのですが、そこにすべてが立ち現れる場所ですね。その場所が絶対無だと「無から有が生じる」ことになりますね。そういう誤解が生じやすいですよ。

**やすい**：事物やそれに照応する意識という有や無を超えていると言う意味で絶対無ですね。意識経験が生じる場所は、意識経験自身の生む働きのようなもので、意識経験の内容と区別されるということですね。何もないものから何かが生じるという議論



ではないわけですが。ただそういう絶対無という表現が適切だったかどうかは議論の余地がありますね。

**佐々木**：物質の起源だとか、最小単位などの議論で、エネルギーから物質が生じたとかエネルギーが光や熱に転化するということがいわれ、そのエネルギー自身は質量や形的には無だということが言われたでしょう。これは西田哲学では有の場所の問題であって、絶対無とは次元が違いますね。

**やすい**：そういうこともあって、余計に難解になったのでしょうね。ただ実在が現われる場所ですから、生きていくということとでもあるわけで、逆に言えば、死と向き合うということとは絶対無は深く関わっているのではないかと思えますね。

**佐々木**：何事もとことん突き詰めて行くと命がけになつてくる場合に、ありありと存在の実相が見えてくるみたいなことですね。西田は自ら肋膜を患いながら、次から次へと妻子の死に襲われる中で、『働くものから見るものへ』移って、「場所の論理」を形成した、それは絶対無＝死との対話でもあったということですか。

**やすい**：真に生きるためには死と向き合わなければならぬということですね。みんな死んでいくわけでしょう。それが生きていくということですね。そして生きていくということとはとつもなく奇跡であり、有難いことなんです。せつかく生かされているのだから、いっぱい感じて、いっぱい表現し、自らの可能性にどんどん挑戦すべきなんだということですね。

**佐々木**：まだ『西田哲学入門講座』は、一般者の自覚的限定や、行為的直観、絶対矛盾的自己同一など延々と続きますので、いったん、中断しましょう。

**やすい**：残念ですが、仕方ないですね、他の仕事も報告しなければなりませんから。

### 3 『評伝 梅原猛 哀しみのパトス』

**佐々木**：「やすいゆたか」と言えば梅原猛の評伝を書いた、梅原猛の研究者だと思っている方も多いでしょうね、なにしろ『評伝 梅原猛 哀しみのパトス』と『梅原猛 聖徳太子の夢 スーパー歌舞伎・狂言の世界』の二冊をミネルヴァ書房から出版されたのですから。経済哲学の研究者というイメージは、すっかり払拭されましたね。

**やすい**：だって、駿台や代ゼミで予備校講師をされていて、予備校が衰退しますと、大学じゃ食べていけないので、高校の非常勤の社会科教師でしょう。どうしても幅広い教養で勝負するしかないので、経済哲学ばかりやってられないわけです。梅原猛先生の本は日本史や仏教思想の理解にとっても役に立つので、読んでいたわけです。

**佐々木**：ああいう情念や怨霊の世界なんかに興味があったのですか。

**やすい**：実は『隠された十字架 法隆寺論』や『水底の歌 柿本人麿論』がもてはやされていた頃は、一九七〇年代ですが、そういうオドロオドロしい世界は生理的に嫌だったので、ちょっと覗いて読んでいませんでした。それが八〇年代の終わりごろに講談社文庫の古本で百円で買った『美と宗教の発見』が「目からウロコ」ですね、というか恐いもの知らずみたいに権威に挑戦していて、まことに痛快だったのです。

**佐々木**：日本文化の伝統を、鈴木大拙は日本的靈性は禅宗と親鸞からだといひ、和辻は尊皇思想中心に日本思想史をまとめ、丸山真男はその時代ごとに大陸文化を消化していた蛸壺型と決めつけていたわけですね。梅原は仏教が日本文化の伝統の背骨になっていることを説き、最澄や空海など日本の仏教思想史の文献をきちんと読んだ上で書いているとはとても思えないと彼らを高飛車に批判したのでしよう。

**やすい**：その部分を引用しましょう。

「私はもし丸山氏が、古事記を読み、日本書紀を読み、祝詞を読み、『成唯識論』をよみ、『華嚴經』を読み、『法華經』を読み、『大日經』を読み、浄土三部經を読み、空海を読み、円仁（七九四〜八六四）を読み、源信を読み、法然（一一三三〜一二二二）を読み、親鸞を読み、日蓮を読み、一遍（一二三九〜一二八九）を読み、羅山（一五八三〜一六五七）を読み、宣長を読み、篤胤を読み、慈雲を読み、そして、日本の美術や文学や芸能や民俗の實際をしらべ、その上で、精神史は不可能だ、座標軸はないというのなら丸山氏を許してもよい。」

しかし、そういう本を読まず、またほとんど読もうともせず、日本の美術や文学や風俗について一向に調査しようともせず、性急に、日本では精神史が書けない、日本の思想はツギハギだ、タコツボだというのは到底許しがたいのである。

丸山氏は彼がヘーゲル（一七七〇〜一八三一）の哲学にそそいだ学問的情熱の何分の一かを、『法華經』や『浄土三部經』にそそいだ後に、断定すべきだったのである。

一人の人間が、バラバラのタコツボ的思想しかもたない  
と断定するのは、一人の人間をバカだというにひとしい。  
一つの国を、バラバラのタコツボ的思想しかもたないと断定するのは一つの国をバカだというのにひとしい。

ここでバカだと断定されているのは、自国なのである。そんなに容易に、自己の精神に愚劣の烙印をおしてもよいのか。愚劣の烙印をおされて然るべきなのは、自国の精神の伝統の方なのか、それとも精神の伝統を全く失って何一つ信じようともしない、あわれな近代人の方なのか。」

梅原は天皇制の内圧の下で、近代知識人は宗教的痴呆になつていたと診断したのである。元々江戸時代からの檀家制度で、仏教は経済的基盤があり、宗派争いが禁じられていましたので、仏典や祖師の書を研究するという志向に欠けるところがあったのです。

それで奈良・平安時代の仏教は、鎮護国家や加持祈禱中心のオカルト的呪術的なものと捉えられ、レベルが低いと見なされていたのです。それであまり空海の著作の研究も進んでなかったようですね。現在は『弘法大師空海全集』が出ていまして、非常に分かりやすく現代語訳もなされています。それで空海が大思想家であることはよく分かるのですが、それ以前は読まずに、簡単な解説で高をくくっていたということでしょう。

佐々木：でも空海『秘蔵宝鑰(ひそうほうやく)』序の冒頭の部分だけでも空海のすごさは窺えますね。

「悠悠たり悠悠たりはなはだ悠悠たり

内外の縑紉(書物)千万の軸あり

杳杳(えうえう)たり杳杳たり甚だ杳杳たり

道をいひ道をいふに百種の道あり

書死(た)え諷(ぶ)死えなましかば本何がなさん

知らじ知らじ吾も知らじ…(欠文)…

思ひ思ひ思ひ思ふとも聖(じやう)も心(しる)ことなけん

牛頭(神農氏) 草を嘗めて病者を悲しみ

断菑(だんし)周公旦(車を機(あやつ)つて迷方を愍(あはれ)む

三界の狂人は狂せることを知らず

四生の盲者は盲なることを識(さと)らず

生れ生れ生れ生れて生(じやう)が始めに暗く

死に死に死に死んで死の終りに冥(くら)し」

**やすい**：梅原先生は、当時病気がちで長くないのではないかと不安だったそうです。それで今の内に言いたいこと言っておかないとということだったらしいのですが、近代日本の代表的知識人たちを宗教的痴呆だと断じた迫力には圧倒されました。

**佐々木**：それはやすいさんが当時廣松渉批判から、マルクス批判へとヒートアップされていて、それで梅原猛を読んで励まされたと言っていることではないですか。

**やすい**：それは大いに考えられますね。ともかくこれは梅原猛を読まなくてはと思ひまして、『隠された十字架 法隆寺論』を読みましたら、別に彼の説明を納得したわけではないのですが、魂が震えるのを感じたのです。たしかに法隆寺というのは何かの気配があるお寺でして、ただ聖徳太子の徳を偲んで再建されたというだけではないということは感じていたのですが、それがひよっとしたら怨霊鎮魂ということかもしれないと思つたわけです。

**佐々木**：梅原猛を読むというのはたくさんの方がしているわけですが、評伝を書くのはやすいさんだけですね、どうしてそこまでいったのですか。

**やすい**：現代思想研究会というのを自宅や妻の書道教室を借りて月に一度していきまして、そこで『知識人の天皇観』をまとめることになり、私は「梅原猛と天皇家」を担当しました。さらに『知識人の宗教観』では「循環の思想は人類を救う」梅原猛の「宗教観」を書いたのです。それで梅原先生はなかなかよく書

けているので、梅原猛で一冊まとめてみたらと薦めてくださったわけです。

**佐々木**：ただ研究内容や思想を解説するだけなら、書けるかもしれませんが、梅原猛の人間に迫るとなればまた全く違いますが、大変だったでしょう。

**やすい**：それが『学問のすすめ』という梅原猛の自伝を読んで興味深いことに気がついたのです。梅原猛の実父は梅原半二でして、彼は後にトヨタの研究所長になつたぐらいの日本の戦後経済成長に大いに貢献した技術畑の人ですが、大学は東北大学で仙台の魚屋さんに下宿していたのです。ところがその下宿先の娘石川千代と恋仲になってしまいました。当時梅原家は半二の兄の半兵衛が家督を継いでいまして、そのために半兵衛は慶応大学の進学をあきらめ、弟に学問する夢を託していたわけです。なのに下宿先の娘とできてしまい、学生の間際でけしからんということ、梅原家の実家が猛反対したわけです。半二と千代は純愛を貫こうとしますが、心労で二人とも結核を患って、半二は実家に連れ戻されます。

ところが千代は妊娠してしまったのです。医者は、結核なのでお産は命取りの恐れがあるので、墮胎をすすめましたが、千代は命がけて愛した人の子供はたとえ自分が死ぬことになっても墮せないといって、猛を産んでしまったのです。でも彼女は結核なので、猛とも切り離され、姉の家で猛が一歳二ヶ月でなくなります。まだ二十歳だったのです。

猛は梅原家に引き取られ、半兵衛と俊夫妻が育てたのです。それで彼は伯父夫婦を実の両親と思ひ込まされて育てられます。

中学生になってやっと真相が分かるのですが、伯父夫婦が実の父母以上に彼を熱い愛情で育てたので、彼は実母のことは一切ふれないようにしていたらしく、実父との関係もずっとぎくしゃくしていました。

**佐々木**：それが『湖の伝説 画家・三橋節子の愛と死』（新潮社）を書いた後で急に実母のことを語りだしたということですね。

三橋節子は、癌で右手を切除して、左手で余命三年間で素晴らしい絵を息子たちのために遺したのでしよう。つまり幼子を遺して死ななければならぬ母親の哀しみが、左手で素晴らしい芸術を生んだというお話で、その話を書いていると梅原は実母のことを語らずにはいられなくなつたわけですね。

**やすい**：ええ、それが『湖の伝説』は当然、梅原は実母と重ねながら書いていたと思つていたのですが、それが「不幸な人間の生涯を不幸でない人間が書くのはそういう不幸にたいする冒瀆ではないのか」と書いているのです。これは実母を意識していたら書けない言葉ですね。

**佐々木**：ということは『湖の伝説』を書いたことよって潜在意識の中に閉じ込めていた実母への想いが堰を切つたように氾濫してきたということですね。

**やすい**：そうなんです、存在に衝き動かされて動くタイプなんです、きっと梅原猛という人間は。三橋節子は幼子を遺して死ぬ母の哀しみが溢れて「湖の伝説」や「三井の晩鐘」など魂を震わすような絵が描けたのですが、それを見て受けた感動が、

梅原の心の奥底に届いたのです。

**佐々木：**「我が心深き底あり、喜も憂の波もとどかじと思ふ」という西田幾多郎の歌を連想しますね。西田は喜びや憂いの届かないところにおいて自分の哀しみを見ていたわけですが、三橋節子の哀しみは梅原を飲み込んでしまつて、意識下に隠していた生母への想いを引き出してしまつたということですね。

**やすい：**だから彼はすぐに仙台に行き、東北の蝦夷の文化を研究します。そして蝦夷が逃れた蝦夷（北海道）のアイヌ文化を尋ねます。アイヌは蝦夷の子孫なのです。そのユーカラからイオマンテ（熊送り）の祭りに接し、この世とあの世を往還するアイヌの思想に出会つて、これだとうとう求めてきたものに到達した気がしたわけです。これが元になつて、親鸞の『教行信証』の「二種回向」論を高く評価するようになります。つまり生母への想いが彼の宗教観を決定づけているのです。

**佐々木：**つまり生母はあの世に行つたけれどまた戻つて来るということですね。つまり梅原は生母を取り戻したいという気持ちを心の奥底に持つていて、自分が生まれる代わりに死んだ母を取り戻すのは、自分が死ぬことによつてではないかという潜在意識があつて、それが青年梅原の死への衝動やデカダンの原因になつたとやすいさんは分析されていますね。

**やすい：**生母千代は、潜在意識の中に仕舞い込まれていたのです。しかしそつう奥底の哀しみは、無意識に梅原の行動を規定するのです。千代が潜在意識の中で、梅原自身にも分からない

かつたわけですが、梅原に独特の怨霊アンテナを与えたのです。聖徳太子や柿本人麻呂まで怨霊だと気づいたの梅原だけだったのです。

**佐々木：**なるほどそれで梅原の生い立ちと彼の仕事結びつくわけですが、そつう梅原論は、生い立ちに還元する理論だから、彼が格闘した社会との関連で梅原の理論や思想を説いていないので、あまり意味がないと先輩や友人から相当反発があつたようですね。

**やすい：**その批判は一理あるのですが、千代の不幸というも戦前の地主層のプライドみたいなものがあつたわけで、その犠牲になつたわけでしょう。社会的な背景はあるのです。どの程度生い立ちが影響するのは、ケイス・バイ・ケースでしょう。また地主制の背景には大日本帝国憲法下の天皇制があつたわけで、決して生い立ちだけに還元してはいたわけではありません。

梅原だけに特別の怨霊に関する感受性があるということは、生い立ちで説明するのがもつとも納得がいくのです。もちろん出生ですべてが決まるわけではないし、母の怨念を身に受けていない人は、怨霊に対する感受性がないとは言えませんが、梅原の場合は、そこに彼の特別の感受性を解く鍵があることは確かです。

**佐々木：**ただ、やすいさんの梅原論は、福音書を精神分析して「聖餐による復活」仮説を立てたように、梅原猛の生い立ち、出生の秘密を精神分析して、彼の怨霊史観を解説しています。その結果、梅原猛の人生から怨霊史観が出てきた格好になりま

す。それは伝記としてはなかなかドラマティックでよいわけですが、学説としての怨霊説の根拠を薄弱にしてしまっているのではないでしょうか。

**やすい**：いや、梅原説の内容の紹介にも力を入れていきますから、そういう懸念はないと思います。それに怨霊説というのは、怨霊に対する感受性がなければピンときませんので、梅原が怨霊との関わりを出生にまつわって持っているということが、その学問的な説得力を弱めるというのはおかしい話です。つまり怨霊について何も感じない人は、自ら怨霊説を唱えることもありませんし、誰かが唱えている怨霊説に対しても学問的価値を認めることはないでしょうから。

**佐々木**：やすいさんは権力を握った加害者が、自分たちが迫害した怨霊を恐れて、怨霊の心を理解し、それを叶えようとすることで鎮魂するのを和の心として、大変いい伝統だとして積極的に評価されていますね。

**やすい**：中国などの場合は、勝者は敗者の墓を暴いて、遺骨に鞭を打ったり、膾にして死肉を食べたりすることがありますが、日本の場合は、織田信長は中国の真似をして浅井・朝倉の頭蓋骨に酒を汲んで飲みましたが、そういうのは例外でしょう。権力闘争は正しいから勝つわけではないのです。さぞかし悔しい思いで恨みをのんで死んだので、祟られるのではないかと勝った側が脅えているわけですね。ですから災害や疫病などがあれば、祟りだと受け止められます。それで敗者を神として祀り、敗者の願いを叶えようとします。

聖徳太子は仏教中心の平和国家を作ろうとしていたというので、朝廷や藤原氏は仏教中心の国づくりに励みました。柿本人麻呂は和歌を大成した人でしたから、彼を歌聖と崇め、彼の歌集を中心に『万葉集』を作って、和歌を文化の華としたわけです。敗者の思いを叶えることで鎮魂しているということですね。

**佐々木**：聖徳太子でも柿本人麻呂でも後の菅原道真でも文化的には第一人者だったので、そういう人の怨念は特に恐れられて、それでその後の歴史は彼らの思いを実現させるというように動いたようですね。

**やすい**：聖徳太子の思いに拘ったのが聖武天皇ですね、それで全国に国分寺・国分尼寺を置き、東大寺に大仏を置いて仏国土を実現させたつもりでした。ただそういう国づくりが人民の生活を窮乏化させ、和の国の基礎を崩してしまうのだということでは智慧が回らなかった。柿本人麻呂や大友家持の思いを深く知ろうとしたのが平城天皇で、彼は柿本人麻呂の亡霊と親しく和歌について語らっています。

**佐々木**：「人麿は平城の帝と身をあわせ」と『古今和歌集』の仮名序にありますね。帝が死者とも歌について語らうという日本文化の伝統を見直したことは梅原猛の大きな業績ですね。

**やすい**：ええ、かえって新鮮でしょう。時代が違うからこの平城の帝は平城天皇ではないという解釈をしていた国文学者が多かったようですが、怨霊との文学的な語りというのは雅の極みですよ。

**佐々木**：石塚さんとの対話ということでしたら是非縄文文化論にも触れて欲しいですね。

**やすい**：『隠された十字架 法隆寺論』は再建された法隆寺が、実は聖徳太子の跡継ぎである山背大兄皇子を襲撃した張本人の巨勢徳太が巨額の寄付をしていることが分かったところからひらめいたわけですが、この本は法隆寺の謎解きだったのです。そこで、柿本人麻呂の研究を深めるかたわら、聖徳太子に関する四巻本を梅原先生はまとめられました。当時、京都市立美術大学の移転問題で超人的な活躍をされておられた最中だったのですが、同時進行の形で、三橋節子論『湖の伝説』で、生母への回帰がおこり、母なる東北の蝦夷のルーツである縄文文化論へのめりこみます。

**佐々木**：なるほど常人のものさしでは測れない巨人ですね。縄文土偶について、妊婦の像であること、デフォルメされていて、特に目が異様である、腹の真ん中に縦真一文字に切り裂いた線がある。ばらばらに壊されている。というような特徴があります。アイヌの浦川はるさん通称タレばあちゃんの話で、妊婦が亡くなった場合に、一度葬った妊婦の遺体の腹を切って胎児を取り出し、妊婦に抱かせて葬るという習慣があると聞いて、土偶の謎が解けたとしていますね。

**やすい**：ただの妊婦の像だと、豊穣の女神と考えられますが、瞳孔が開いたような異様な目をしていますね、だから妊婦の遺体だということで、胎児を取り出したのが縦一文字の線です。

**佐々木**：どうして妊婦の像を副葬したのですか。

**やすい**：それは胎児も一緒にあの世に送るので、大変だから、土偶を添えまして呪いにしたわけです。妊婦があの人にけるための呪いですから、こちらで土偶を壊しておけば、あべこべのあの世では完全な姿になるということですね。

**佐々木**：どうも梅原猛とやすいゆたかの、縄文人のあの世観には大きな違いがあるようですね。

**やすい**：というより梅原縄文文化論ではあの世は、この世とほとんど同じだが、左右上下が逆になっているというのと、あの世は肉体を離れた霊が住む霊界であるというのが、混在しているように思われます。私は前者だけが縄文人のあの世観と捉えています。あの世を霊界と考えるのはアイヌのユーカラの一部のあの世観ではないかと思われれます。

**佐々木**：アイヌは縄文文化をそのまま保存しているように梅原猛は捉えているけれど、実はアイヌは蝦夷だった頃に浄土教化に接していて、それがあの世を霊界と捉える原因ではないかということですね。

**やすい**：あの世の食事のことをヨモツヘグイというらしく、一度その食事を食べたならこの世に戻れないのです。葬式のときに茶碗を割って送りますね。割るのはこの世で完全はあの世で不完全、この世で不完全はあの世で完全という「あべこべ原理」

からですが、茶碗を送るのはあの世でも食事があるということですから、あの世でも肉体を持ち、食事をしているということですね。つまり霊だけの世界、霊界ではないわけですね。

**佐々木**：イオマンテでは、この世で熊は人間に食べられて、あの世に霊が送られ、あの世では熊の霊も、木の霊もみんな霊は人間の姿をしていると梅原猛はアイヌの往還説を説明しますが、やすい説では縄文人はどう考えていたのですか。

**やすい**：いや私のオリジナルではなくて、梅原先生は、この世とあの世は天を面対象にして存在しており、その内容はほとんど同じだとされているのですが、この世でなくなると霊は蝶や鳥になってあの世に行つて、そこでセックスで母の胎内に入つて肉体を持って誕生するのです。そしてあの世で寿命が過ぎたら、この世に舞い戻つてまた誕生するということですね。

**佐々木**：霊が人間の姿というのは、そう言えば縄文人がどうして思いつくのか分かりませんね。

**やすい**：アイヌは一見原始社会に見えますが、実際には各国と盛んに交易していた民族でもあるわけで、交易品はみな同じ人間にとっての価値に還元できるので、霊は同じ人間と考えたのではないでしょうが。

**佐々木**：縄文人の考えていた霊は非物質的な精神的実体ではなく、肉体の中の不死の部分だったというのが、やすいさんの解釈ですね。

**やすい**：ええ、物質対精神を二元論的に対立させて捉えるのは縄文人には当てはまりません。肉体の不死の部分が霊と呼ばれ、死後それは鳥や蝶や魚になつて異界に向かうとされていたわけです。勾玉は霊の体内での姿ではないでしょうか。非物質的な霊という精神的実体を考え付くのは、かなり高度な抽象が必要です。その前提としては交易の発展などが必要でしょう。

**佐々木**：ヤマトタケルは、死後巨大な白鳥になりますが、『日本書紀』では遺体がまるごと鳥になつたようですね。それはヤマトタケルは高貴な存在なので、体全体が不死の霊だつたということですかね。

**やすい**：心身二元論ではないわけですね。ただヤマトタケルの場合は、道教の尸解術の影響も考えられます。つまりいったん死んでも死体から脱皮するみたいに抜け出して甦る術です。とは言いましても別に甦つたわけではないので、やはり霊が白鳥に変態したわけですね。それがこの世に未練や恨みを遺しているのだからこの世に行けないで、この世での生まれ変わりを目指して飛んでいるとも解釈できます。

**佐々木**：霊が精神的実体ではないという例で、八岐大蛇から取り出した天叢雲剣というのも八岐大蛇が日本列島とすれば天叢雲剣はその霊と考えられるわけです。

**やすい**：その話は、ひよつとしたら石塚さんから教わつた話かもしれませんがよ。ともかく未開人の霊信仰は心身二元論とは限



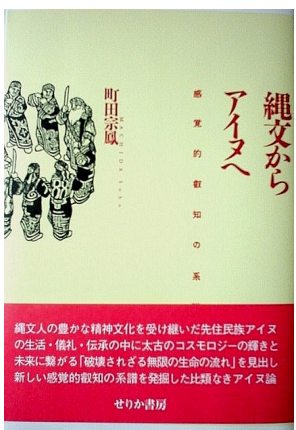
らないわけです。それがいわゆる記紀神話にまで名残があるという事です。

**佐々木**：とはいえ、シャーマニズムなどは霊が憑依したり離れたりしますから、霊はかなり一般の物質とは別次元の存在と捉えられていることになりそうです。

**やすい**：ええ、シャーマニズムの起源とか未開社会のシャーマニズムの実態とかの研究が必要で、精神的実体としての霊觀念の確立をどの時期に置くかは、私もまだはつきりしたことは言えません。

**佐々木**：このあたりは、イエスの弟子による聖餐の問題とも関連しますね。カムイ（神）である熊を食べるイオマンテからイエスの弟子による聖餐飯説を導出している人もいましたね。

**やすい**：町田宗鳳さんですね。



たしか『縄文からアイヌへ』に  
そういうアプローチがあり、  
イエスの聖餐に触れていたの  
でびっくりしたことがあります。

熊を部族のトーテム動物と  
しますと、その部族は熊の生まれ  
変わりということになり、この  
世で食べられた熊はあの世で人  
になっていることになり、あの  
世で食べられた熊はこの世では  
人になっていることになり、人  
から、熊を食べることは人を食

べることになるわけです。そうしますとトーテム動物と人のあの世とこの世循環として捉えられます。

**佐々木**：この世とあの世の生命循環という観点で、梅原猛は大いなる生命の共生と循環を説きましたが、梅原猛の場合は生母を取り戻したいという、奥底の衝動によって生まれたやむにやまれぬ往還思想ですが、やすいさんは、縄文人の異界信仰に対する学術的な関心であって、やすいさん自身は異界信仰は持つておられませんね。

**やすい**：梅原先生だって、一九六〇年代に『仏教の思想』を書かれたときには、親鸞の二種回向については触れられていません。『湖の伝説』からブレイク・スルーして、アイヌの往還思想へ、さらに親鸞の二種回向に行き着かれたのです。その意味ではやはり梅原猛は怨霊に衝き動かされて生きているということですね。

**佐々木**：ところが当の浄土真宗の本願寺にやすいさんが問い合  
わせたら、あの世や浄土が実体的にあって、死後そこに往生す  
るといふのは迷信みたいに言われたのでしよう。

**やすい**：ええ、涅槃というのは阿弥陀仏の慈悲に抱かれて惑い  
や苦しみがなくなった状態で、これが往相回向です。そしてそ  
の心を日々の生活に返して、衆生を救おうとするのが還相回向  
だという説明です。まあキリスト教で、イエスを自足の思想家  
にすぎないと言っようなもので、どうしてそれが浄土真宗なの  
か分かりませんね。

**佐々木**：唯識論を踏まえて、心のあり方に救いの道を求めているのであれば、そういう解釈も成り立ちますね。

**やすい**：ええ、唯識論的な方向で意識のあり方をとことん追求すれば、凄く難解な議論になってしまつて、かえつてだれも理解できなくなり、だれも救えなくなるので、結局阿弥陀仏の慈悲に頼ろうとするわけです。ですから、唯識論や禅宗から浄土教が起こってくるということです。浄土教では阿弥陀仏の慈悲で救われるという論理で易しく説いたわけですが、それは阿弥陀仏や極楽浄土の実体化につながるので、実体化批判が起こつたわけです。

**佐々木**：『法然の哀しみ』は読み応えがありましたね。法然は、これまでは父母が殺されてから出家したとされてきたのが、そうではなくて、武士をしているとろくな死に方ができないので、父母の勧めで出家して、比叡山に登る報告を父母にしたときに、父から自分は何時殺されるかわからないから、菩提を弔つて欲しいといわれ、その言葉通り、土地争いで殺されてしまったのでしよう。それで法然はなすすべがなかったので、信仰の無力を感じ、父母のような醜い争いに殺された罪業の深い人でも救われる教えを求めて、専修念仏に開眼したということですね。

**やすい**：ええ、梅原猛の哀しみのパトスが、生母の哀しみだったのですが、法然の場合は主に父の武士としての罪業ですね、人間誰しも罪業が深いわけですし、だから苦しみの世界から解

脱することはできないのです。いくら僧侶が万巻の経を読み、難行苦行を重ねたところで、この苦しみの世界から救い出すことはできません。法然は智慧第一の法然坊と言われるくらい優秀で諸宗兼学の天台宗ですから、幅広く顕密の経典を読み込んでいたわけですが、どうにもならないわけですね。

**佐々木**：それで善導の『観経疏』で、阿弥陀仏を瞑想によつて念じたり、いろいろ善行を積むことにはいろいろご利益があるのだけれど、一般庶民というか罪業の深い凡夫はなかなかそういうことはできないので、「**仏の本願に望むれば、意（こころ）衆生をして一向に専ら阿弥陀の名（みな）を称せしむるべし**」という言葉を見つけて、そうか、要するに「南無阿弥陀仏」と唱えれば阿弥陀仏は救つてくださる、これに尽きるのだなと覺つたわけですね。

**やすい**：それがとつてもないことなんです。だって専修念仏を貫けば、万巻の経も、厳しい修行も、壮大な仏教伽藍も巨大教団もすべて必要ないことになりますね。

**佐々木**：法然は「聖道門」と「易行門」に分け、既成の修行は聖道門だったけれど、そういう修行をやり遂げ、覺りを開くのは末世にあつては到底無理だということです。末世にあつては、人間がどんなに努力しても覺りは無理なので、慈悲の権化である阿弥陀仏の慈悲の力でしか極楽往生は叶わないということです。だから自力修行は身の程知らずで、阿弥陀仏の慈悲の力を信仰するしかないということです。

**やすい**：そのことを分かっている、だから修行しないのではなく、修行のかたわら同時に阿弥陀仏の慈悲にもすがるので問題は無いのですが、自力の修行すること自体が間違っているとなれば、既成の仏教を否定することになります。寺院も教団も修行も否定するとなれば、比叡山や南都の顕密双方の僧たちがこぞって念仏停止を朝廷に働きかけることになるのは必定です。すね。

**佐々木**：法然は専修念仏の教えを『選択本願念仏集』にまとめただけですが、これは九条兼実が篤く法然に帰依して、そう簡単に話を聴ける状況ではなかった、教えをまとめてもらったものでしょう。法然はこれを兼実の他には少数の弟子にしか読ませなかったということですから、専修念仏の危険性を十分理解していたということですね。

**やすい**：ええ、法然にすれば、罪業深い父を救える、ひいては一切衆生を救済できる唯一の教えとして、やむにやまれぬ気持ちからの専修念仏でした。だから決して排他的な意図ではなかったわけですね。でも彼の結論から言えば、寺を建てたり、修行をしたりが、末法では何の益もなくなることになるので、既成仏教の全否定と受け止められかねないわけですね。それで比叡山や南都の圧力で、『七箇条起請文』を作成しまして、弟子たちに署名させ、他宗を排撃したり、弥陀の本願に守られているから戒律を破ってもいいのだとわざと飲酒食肉淫行などの悪いことをしたりするのを止めさせたわけですね。

**佐々木**：浄土宗では『七箇条起請文』を法然の思想として取り

扱っていますね、やすいさんは他宗から誓約させられた文書だという解釈ですね。

**やすい**：『七箇条起請文』を守らないと宗派として生き残れませぬから、法然の思想として受け止めるのはやむを得ませんが、歴史的経過としては、当然他宗の僧侶たちとの談判の末、取りまとめられたものであることは疑えないところでしょう。

**佐々木**：それでも大法難は避けられなかった。建永元年（一二〇六年）の建永の法難、いわゆる安楽・住蓮事件です。後鳥羽上皇に仕えていた松虫・鈴虫という女房が、後鳥羽院が熊野詣をして留守のときに、安楽・住蓮の六時礼讃を聴きにきて、後鳥羽院の許可なく、そのまま剃髪して出家してしまつたのです。後鳥羽院は、安楽・住蓮が都の女性たちに超人気だったので、色香でたぶらかしたと激怒して、念仏停止を命令したわけですね。そして安楽・住蓮は死刑になり、法然は四国に、親鸞は佐渡にと幹部たちも流刑になつたのです。

**やすい**：この事件の真相はもう一つはつきりませんが、要するに後鳥羽上皇に仕えるのがいやで、法然たちの下に出家を願つて来た、女性たちを法然たちが皆殺しになる危険を犯しても守ろうとした事件だと思えます。それだけ女人往生ということに大きな意味があつたのです。悪人往生、女人往生というので、虐げられた人々、罪業に喘がざるをなかつた衆生程度に法然たちは自らの命を差し出すのに躊躇がなかつた、まことに偉大な人物です。

佐々木：もつとも住蓮房の辞世の歌に「極楽に生まれむことうれしさに身をば佛にまかすなりけり」とありますから、彼らにあっては往生はむしろ本願だということもできますね。

やすい：この女人往生というテーマは、実は梅原猛の生母千代への思いと重なります。フェミニズムは女権獲得のために女性自身が戦ってきたことを注目しがちですが、女性の運動としてはそれは当然だとしても、男性が女性の信仰や命の大切さに目覚めて自由に生きようとするのを命がけて守ったことも忘れてはなりません。法然たちの運動をもつと注目すべきですし、梅原のように生母の哀しみを背負って、その菩提の道を無意識的に模索した人生というのも見直すべきでしょう。

佐々木：法然ではあまり前面にでなかった二種回向が、親鸞の『教行信証』では浄土真宗の眼目みたいにいわれているのですが、親鸞を二種回向の信仰に駆り立てたものは何ですか。

やすい：梅原猛は、越後や関東での布教で民衆の中に縄文時代から継承してきたこの世とあの世の往還思想があり、またこの世に戻ってくるということを実に願っているわけですね。それだと源信の「厭離穢土、欣求浄土」だけでは説得力がありません。それで浄土で修行をし、菩薩になってこの世に戻って衆生を救うという二種回向を取り入れたのではないかというのです。しかし私は、親鸞自身の個人的な怨念があると思いますね。建永の法難で法然たちの浄土教団は大打撃を受けました。親鸞は越後や関東で布教しましたが、大教団を作り上げたわけではありません。晩年は京に戻って寂しく暮らしたのですが、やは

り死んでも死に切れない、この世に戻って浄土真宗の教えを広げたいと念願していたのではないのでしょうか。

佐々木：それでは自力信仰になってしまい、絶対他力とは言えませんね。

やすい：ええ、現代思想研究会でもそう批判されました。それはそうだけれど、そういう理論と私はまた別でしょう。「主上臣下、法に背き義に違し、忿をなし、怨みを結ぶ」とかかんかに怒っていますからね、法然の教団が栄えていたときは上は法皇から下は遊女まで念仏の声は都に溢れていたわけでしょう。それが言われなきピンクスキヤンダルをでっち上げられて潰されてしまった、やはり死んでも死に切れない、また必ずこの世に舞い戻つてという気持は、潜在意識的には、あったのではないのでしょうか。

佐々木：では『評伝 梅原猛』についてはまだまだ『地獄の思想』なども残っていますが、この辺で切り上げましょう。続編にあたる『梅原猛 聖徳太子の夢 スーパー歌舞伎・狂言』の世界は後で取り上げることにして、『ネオヒューマニズム宣言』などWEBでの活躍を振り返ってみましょう。

#### 4、『グローバル憲法草案を作る会揭示板』

**佐々木**：やすいゆたかという名前は、WEB上ではちよつとした顔ですね。もしWEB文化がなければ、やすいゆたかの名前は、ごく一部の人にしか知られていなかったでしょうね。

**やすい**：ほめられているのか、けなされているのか分かりませんが、未だに大して知られてはいないと思いますが、哲学・思想関係では、少しは知られているかもしれません。ただWEBに頼っているのです、この八月十三日だったと思いますが、突然ホームページ『やすいゆたかの部屋』が消されてしまったのです。

**佐々木**：エッセイに歌詞を丸写ししていたのでしょ。まずかつたですね。それにしてもせめて一日でも警告期間をおいてくれればよかつたのに、大変だったようですね。

**やすい**：別のアドレスをとって全部入れ直しましょう。それに連絡を取らなければなりませんし、膨大な時間のロスです。その上、グーグルやヤフーの検索エンジンにかかるようになるまで時間がかかります。古いアドレスの分しか検索に載っていないので、アクセスできない読者がいて大変ご迷惑をおかけして、誠に申し訳ありません。もう半月以上になります但未だに検索エンジンにかかりません。

**佐々木**：せっかく知名度も上がってきていたようですね、シヨックですね。

**やすい**：ええWEBでの活躍だけが頼りですから、ホームページ削除は致命的です。

**佐々木**：やすいさんがホームページを始められたのは何時からですか？

**やすい**：さて、よく覚えていませんが、しばらくして『グローバル憲法をつくる会揭示板』というのを始めましたね。あれがどうも二〇〇一年の六月のようですね。

**佐々木**：読売新聞で紹介されましたね。でもこのところずっと開店休業ですね。

**やすい**：議論がグローバル憲法を作ろうという形でまとまる前に、ナンセンスみたいな議論が出て、それと対応するのに賛成派が消耗するとかで、まったく煮詰まりませんでした。それで意欲がなくなつて書き込む人が減り、私一人で書くわけにも行かず開店休業ということですね。どうせなら主旨に賛同する意見だけ載せるみたいにしなないと盛り上がらないのかもしれないですね。

**佐々木**：グローバル憲法をグローバル市民で議論して、グローバル国家をグローバル市民が設計し、イニシアティブを握っていくというのは面白い試みだと思います。しかし成功させよう

とすれば、やはりグローバル憲法制定を推進する団体を作って、そこで議論して試案を提案し、投票箱みたいなものを設置して、賛同者をカウントしたり、訂正案を募ったりした方がいいでしょう。やすいさん一人の運営では長続きしないのは当然です。

**やすい**：できればグローバル・デモクラシーを理念にする、グローバル民主党を結成して、それを母体に推進すべきでしょうね。そういう組織力を資質的に持っていないので無理ですね。

**佐々木**：グローバル憲法は、『歴史の危機 歴史終焉論を超えて』でのヤスパースの歴史論を継承して出てきたものですね。ヤスパースは東西冷戦後の世界連邦による世界統合を夢に描いていたのですが、幸い冷戦が熱戦にならないで終焉して、グローバルな統合の歴史過程に入ったので、グローバル憲法を制定しようというわけですね。ただそれを既成の近代国家間の交渉にまかせていると既得権や覇権にこだわってきちんとしたグローバル・デモクラシーに基づくとグローバル国家にならないというところで、やすいさんがまずグローバル市民の手で作ろうとよびかけたわけですね。また機会を見て再開してくださいよ。

**やすい**：私の試案も前文しかできていないので、一応全文の試案を作ったたき台として提案する形で再開できたらと思っています。第二次世界大戦後は国家単位の戦争がほとんどできなくなっただのに、軍備は常に最先端を保たなければならず、軍費は経済を大きく圧迫しているわけで、欧米諸国は大幅な軍縮に向かわざるを得なくなっています。国家単位の安全保障から、混成の国連警察軍による安全保障に切り替えるというのは次第

に現実性を帯びています。そして国家単位の経済調整が貿易・資本の自由化が進んで逆戻りできない中で、グローバルな所得再配分や金融調整が必要になっていきます。そのためにも国連をグローバル国家に改組する必要があるわけです。

**佐々木**：すでに経済や通信、交通の分野では統合が進んでいるのだから、それに照合した政治統合も必要だということですね。でも既成の国民意識も強いですし、排外意識も強いので、大変ですね。

**やすい**：でも環境問題も待ったなしでしょう。今年の異常気象もそれを示しています。近代国家をなくしてしまうというのはなく、グローバル国家に対しての自治体的なものに変質させていくわけです。

## 5、『ネオヒューマニズム宣言』

**佐々木**：さていよいよ『ネオヒューマニズム宣言』に入りたいのですが、これは一九八六年の『人間観の転換 マルクス物神性論批判』（青弓社）で打ち出された、社会的諸事物を含めた人間観を「ネオヒューマニズム」と呼び替えただけです。

**やすい**：ええ、ただあれは未だに私の主著なのですが、ほとんど売れませんでした。青弓社や仲介していただいた鷺田小彌太さんに大変迷惑をかけてしまつて恐縮しています。もちろん哲学界やマルクス経済学の経済理論学会でも極わずかの人にしかよい評価はもらえなかつたわけです。石塚正英さんはその意味で貴重な存在なのです。

**佐々木**：理解されなかつた理由として、新しい人間観を何と呼ぶべきが決まつていなかつたということですか。

**やすい**：修士論文以来、人間が商品であるという人間商品論と商品も人間であるという商品人間論をセットにしていたのですが、もちろん哲学者からは商品が人間だなんてとんでもない話ですし、経済学研究者からは、暴論にしか思えなかつたらしいのです。

それで古今東西の人間論の中で位置づけることによって、私の人間観の転換の意義を鮮明にしようとしたわけです。

**佐々木**：それが一九九二―三年にかけて『月刊状況と主体』掲載されたわけですね。その中で、国家を生きた人工機械人間としたホップズの『リヴァイアサン』や、人間は事物の知的性質であるとしたパースの『人間記号』論、陽明学の「天地一体の仁」や本居宣長の「もののははれ」論など、やすい人間学を肉付けできる人間学がどんどんできてきたわけですね。

**やすい**：そうなんです、なかなかいい名前が考え付きません。人間は、その種族に属する身体的諸個人だけではなく、人間社会を構成する事物の存在のあり方だという意味で「カテゴリーとしての人間」論を唱えましたが、それほど普及していません。

**佐々木**：それが廿一世紀に入って、割りにすんなり理解されるようになってきたそうですが、どういふことで実感されたのですか。

**やすい**：大学の講義でも特殊講義で『人間観の転換 マルクス物神性論批判』（青弓社）が出た当初に説明してもマニアックな議論として敬遠されていましたが、最近では哲学入門や倫理学入門の概説的な講義の中で、事物も含めて人間を捉える必要を説きますと、共感するコメントが多いのです。特にネオヒューマニズムという表現によって理解しやすくなったのかも知れませんが、ここ数年は受けがいいですね。疎外論もそうですが。

**佐々木**：「ネオヒューマニズム」と命名されたのはどうしてなのでしょう。ネオヒューマニズムでは全く内容が伝わりませんね。それに過去にも三木清などが使っていましたし、今ではサルカ

ールというインドのスピリチュアルの思想家の始めた集団が使っているそうですね。いわば普通名詞化しているわけです。

**やすい**：ええ、そうなんです。たしかに安易で杜撰な面がありますね。でも、「カテゴリーとしての人間」論よりは理解されやすいのです。それにヒューマニズムの歴史的発展として現代ヒューマニズムの行き詰まりを打破する意味で、ネオヒューマニズムといえば、納得しやすいわけなのです。まあ「ネオヒューマニズム」という表現が紛らわしいということで、サルカール派などから抗議がきたら、「包括的ヒューマニズム」とでも改名するしかないでしょうね。

**佐々木**：ヒューマニズムの歴史的展開を踏まえたのは確かによかったですね。

未開時代のフェティシズムも人間が神を作り、ご利益がなかったら、神を攻撃して、取り替えたりするので、人間中心主義という意味でヒューマニズムです。そして古代ギリシア・ローマもヒューマニズムですね。欲望を肯定し、人間は自らの可能性をどこまでも追求します。神々は人間の理想を神格化したものです。ですから太陽まで飛んでいこうとしたイカロスや、大の力持ち超人ヘラクレスなどが活躍します。ヨーロッパ中世は、神中心主義が強調され、人間の欲望を抑圧していましたが、ルネッサンスで、古典・古代のヒューマニズムを復興させようとなりました。いわゆるあらゆる分野で活躍する万能人の登場です。

**やすい**：神に与えられた理性の力で、神の天地創造の秘密を解き明かし、天地自然を人間にとって有用なものに作り変え、支

配していくのが近代ヒューマニズムです。そしてそれが産業革命によって資本主義が確立したわけです。

**佐々木**：その結果巨大な機械制大工業の物質文明ができあがり、労働力は商品化され、人間関係は商品間の関係に置き換えられ、貨幣の論理、資本の論理が貫徹します。物化・物象化という形で、人間は体制や組織や機械システムの部品化されてしまい、大量生産で生み出された同じ商品消費させられるだけの主体性を喪失した、非人格的存在になってしまったということです。この物の支配からの解放を叫ぶのが現代ヒューマニズムなのでしょう。ネオヒューマニズムは、この現代ヒューマニズムでは駄目だ、現代ヒューマニズムを超越しようというわけですね。

**やすい**：現代ヒューマニズムは行き詰まっているということですが。もちろんその現代批判、疎外や物化・物象化に対する批判、主体性回復の主張には大いに共鳴するわけですが。

**佐々木**：最近ヒューマニズム自体に批判が大きくなっているようです。環境問題が厳しくなってきましたので、人間が勝手に勝手に自然を破壊したとし、これまでの人間中心の考え方自体が間違っていたという声が大きくなっています。特に『バイブル』の神は人間のために天地を創造され動物も人間のためにつくったとされ、地上の支配権を人間に与えたという人間中心主義が、環境破壊の元凶だというわけです。そのような反ヒューマニズムの思潮からすると、現代ヒューマニズムにネオヒューマニズムが取って代わるうとするのは許されないのでしょ



**やすい**：人間を身体やそこに宿る人格に限定して、その欲望を充足させることだけ考えるところのような人間中心主義は、大いに反省が必要です。しかしネオヒューマニズムの人間には、社会的諸事物や環境的自然を含めて、その共生と循環を図っていくとするものですから、反ヒューマニズムの批判は当たらないのです。

**佐々木**：生物多様性を守れという議論がありますが、それは決して人間にとって有害な動植物やバクテリアと共存しようとするのではなくて、人間環境として人間のサバイバルにとって大切な生物多様性を守ろうとするものですね。その意味では、身勝手な人間中心主義を批判しているだけで、反ヒューマニズムだって、人間が唱える以上ヒューマニズムであることは避けられないということですか。

**やすい**：菜食主義者は、生きとし生けるものの平等ということ掲げ、不必要な殺生を伴う肉食を否定しています。倫理的に非常に素晴らしい立場ですね。その議論も菜食だけで人間の健康や長寿を保てるという確信の下で実行可能なわけです。それにヒューマニズムを捨てるということは、人間存在のすごさというか、こうして世界中の人々と人間とは何かとか、哲学や平和や愛について語り合ったり、花を愛でたりできると言う存在の素晴らしさがまだまだ十分つかみきれていないのに、あっさり、人間だけが特別じゃないという立場に成ってしまうのは、まことに残念ですね。

**佐々木**：仏教の場合、不殺生戒があり、衆生済度というのは、畜生も含んでいるということ、脱ヒューマニズムのようにみえますが、法と一体化した仏陀は、法の現われとしての諸々の物や衆生として現われるとされます。つまり目覚めた者仏陀にとっては、世界は自己自身の現われでもあるわけです。仏教というのは、そういう仏陀と一体化しようとする営みですから、世界を自己自身として捉えようとするヒューマニズムの貫徹という面があると言えます。

**やすい**：同感ですね。仏教を通して反ヒューマニズムというのは無理があります。もちろん解釈次第だと言えばそれまでですが、ともかく現代ヒューマニズムや反ヒューマニズムにはそれぞれ尤もなところがあるわけですが、ネオヒューマニズムはそれぞれの限界を指摘しつつ、人間概念自体を組み替えることで、ヒューマニズムを脱構築しようとしているわけです。

**佐々木**：やすいさんが現代ヒューマニズムの閉塞を叫ばれるときに、現代ヒューマニズムだと人間は商品化されているけれど、それは本来人間は商品ではないのだけれど、疎外されて本質を喪失して商品という非人間的な状態になっているとし、疎外を克服して、商品でない本来の人間性を取り戻そうというように考えるわけですが、やすいさんはむしろ人間は商品性を得て人間になつたとし、商品としての本質を持つていることを受け止めるようにすべきだということに言われますね。そのあたりはなかなか理解されにくいところでしょう。

**やすい**：その人間商品論というのが、院生時代からの問題意識で、人間が商品であり、商品も人間だということで、人間商品論を展開し、清水正徳先生に「大阪商人的唯物論」というレッテルを頂戴してしまった経緯があります。それ以来ずっと日陰の身ですね。大阪商人なら商品性は問題にはならないわけで、商品性こそ最大の問題で、それを克服することは人間が人間であることを超えるぐらい大変な問題なんだと言いたかったわけ、むしろニーチェ的な過渡であり橋梁であるという問題意識だったのですが、全くそういう思いは汲んでもらえなかったわけです。

**佐々木**：それから坂本賢三さんには、商品も人間だったら、自動改札機や自動販売機も人間だということになる、機械も人間だというのは絶対に認められない「みたいに言われたのでしよう。

**やすい**：そうなんです。今から考えるとあの38年前27歳のときに岡山大学で関西哲学会での発表がネオヒューマニズムにとつてはエポックメイキングだったかもしれないですね。

**佐々木**：『ブティック』以降というのがテーマですので、半世紀近い昔の話はおいといて、『ネオヒューマニズム宣言』をめくつての私との対談で、ユクスキュルの『生物からみた世界』の環境世界論環世界論の話を出されて、生物においても蚤を捉えるには蚤的事物の集合として捉えるべきだという議論を紹介されて、それで機械や衣服や道路や自動車が人間の事物として捉えやすくなりましたね。

**やすい**：その議論『月刊状況と主体』の一九九二年七月号に『シンボルを操る動物 カッシーラーの人間論』の中で紹介した議論です。この度『やすいゆたか著作集第三巻』『人間論の大航海下』に収めることができました。是非参照願いたいですね。  
<http://www.42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/daikoukaige.pdf>

貝の貝殻の話をしみますと、大概の大学生は納得しますね。貝は貝殻に特に個性がありますので、貝殻も含めて貝だとだれしも考えているわけです。ところが貝殻は貝が分泌した炭酸カルシウムが固まって貝の住居兼衣服みたいになったものなのです。ですから生身の身体ではないわけですね。貝の貝殻、蜘蛛の糸、蓑虫の蓑、鳥の巢、獣道というように広げていき、ビーバードムの話で締めくくりますと、難しい「非有機的的身体身体の器官として有機的につながっているわけではないが、人間存在にとって不可欠な部分という意味で非有機的的身体」という初期マルクスの用語がすんなり理解できるのです。

**佐々木**：それで動物の場合は閉じられていて、環境世界が一定だけれど、人間の場合は開かれていて、人間の非有機的的身体である道具や生産物がどんどん多様化し、発展していくということですね。それで文明が開かれ、地球の隅々まで開発され、いまや地球全体が人間の非有機的的身体として人間的自然だというわけです。

この議論の説得力はだれしも認めると思いますが、人間的自  
然、人間の非有機的的身体であつても、それ自身が人間のごとく話をしたり、喜怒哀楽を示したり、価値観を持ち意志や主体性

をもって行動するわけではないから人間とは認め難い人がほとんどでしょう。

**やすい**：ええ、非有機的的身体という意味がきちんと理解されていないわけです。人間が行動するとか、考えるという場合、頭が行動し、考えると言えるでしょうか。感覚器官なしに考えることはできませんから、身体全体で考え、行動するわけですが、その場合に身体は生身の身体に限定できません。非有機的的身体を含めた人間存在がものを考え、行動しているわけです。

**佐々木**：読書するのに、目だとか大脳が働いていて、手が支えています。内臓や足はあまり関わっていないかもしれませんが、それより本や蛍光灯の方が関係あるかも、そして経済の本だと、実際の経済情勢の方が深く読書に関わっていますね。

**やすい**：そうですね。有機的的身体と非有機的的身体とどちらがより感情や思考に関わっているか、一概に決め付けることはできません。それに主観と客観でも、主観が認識し、客観が認識されるという図式も固定的に考えてはいけません。主観が認識する過程と、客観が主観に自己を投射する過程は同一過程であり、意識としては同じだからです。

**佐々木**：西田幾多郎の「物となつて見、物となつて考える」とか「物となつて見、物となつて行つ」ということもやすいさんに言わせれば、純粹経験や行為的直観に即した表現であつて、事物も考え、感じ、行動するということが言えているということですね。やすいさんも西田幾多郎という日本近代の代表的哲

学者を味方につけて、ネオヒューマニズムを展開するとは、なかなか考えましたね。たしかに強力な助っ人ですね。それに本居宣長の「もののはれ」論も物の心や感情を主客未分の論理で捉え返し、ネオヒューマニズムの文脈に取り込んでいますね。

**やすい**：本居宣長の「もののはれ」論は、どうも陽明学の「天地一体の仁」に影響されているのではないかと思います。儒教や仏教などの東洋思想の伝統からも大いに学んで、近代主観主義の個人的人格だけが感じたり考えたりしているという捉え方の限界を乗り越えなければと思いますね。

**佐々木**：その意味で、注目されるのが、パースの「人間記号論のこころみ」ですね。

**やすい**：パースは人間を思考過程と同一視しました。「人間は思考に他ならず、人間の生活は思考の連続である。だから私とは私の述べた言語の集大成のようなものである。ところですべての思考は記号なのだから、人間は記号に他ならない」「人間の本质は、人間が整合的に行動し、整合的に思考するということのなかに存する。そしてこの整合性とは、事物の知的性質、言い換れば、ある事物が他の事物を表示するという性質に他ならないのである」ですから、事物が他の事物を指し示すという事物の存在のあり方が人間だということなのです。パースはこのように身体やそこに宿る人格だけを人間と考えずに、事物の意味連関にこそ人間性を認め、人間を事物の存在性格だと捉え返したわけで、私のいう意味での「人間観の転換」を行っていたわけですね。

**佐々木**：ネオヒューマニズムには、このように多くの先駆者がいるとすれば、それはもはやネオではなくなりませんか、そしてやすいさんが提唱者だと言うこともいえなくなりませんか。

**やすい**：だれが提唱者が問題になるのはおおいに流行してからの話でしょう。まだネオヒューマニズム協会もできていませんし、それにどういう意味でネオかと言いますと、これまでのヒューマニズムの限界を乗り越えるという意味でネオなのであって、二十世紀の現代ヒューマニズムに対して、二十一世紀の思潮としてネオヒューマニズムという位置づけですね。ヘーゲルの労働外化論、初期マルクスの人間的自然などもネオヒューマニズムに入れていいわけですが、ヘーゲルは哲学体系のなかで、事物も含めて人間だという議論を闡明に打ち出したわけではありませんし、マルクスは『資本論』では人間と事物の区別に固執することでフェティシズム論を展開したわけです。

パースも「人間記号論のころみ」の人間論をテーマ的に発展させたわけではありません。三木清も「交渉的存在」という場合に事物も包摂した人間論だと解釈できますが、後の「人間学」では「交渉的存在」というタームは消えています。ですからそういう先駆的な業績を踏まえて、二十一世紀の人間観として「ネオヒューマニズム」を普及させようと考えています。

**佐々木**：「ネオヒューマニズム宣言をめぐって」の対談で、国家を巨大な人工機械人間としたホップズの『リヴァイアサン』が取り上げられず、「組織体人間」論がほとんど展開されていません。それが最近の「ネオヒューマニズムの疎外論」では、組織体も人間だという議論がネオヒューマニズムの中で大きな

場所を占めています。何か変化が生じたのですか。

**やすい**：ホップズの国家を巨大な人工機械人間として捉える人間論は一九九二年に『月刊状況と主体』に掲載しました。だから当然『ネオヒューマニズム宣言』にも入れておくべきだったのですが、抜けてましたね。この問題は、長くなりますので、疎外論の復権について語る際に論じることにしてしまおう。

**佐々木**：最後に、あれこれ解釈するのはいいけれど、肝心なのは変革することだという言葉がありますが、ネオヒューマニズムになることにどういう実践的な意義があるのか、そこがよく分からないという人もいるようですが。

**やすい**：直接的には現代ヒューマニズムの閉塞を打破するということです。つまり「物からの支配」から脱却しようという現代ヒューマニズムは、「物」を「人間」の対極において、何か人間ではないものから支配されていると感じているわけですが、巨大な機械システムや官僚機構、流通・消費機構にしてもすべて人間自身の姿なのです。

**佐々木**：現代ヒューマニズムも自己疎外論をとっているのですから、生産物や組織体が自己自身の疎外された姿として認識されているでしょう。それなら現代ヒューマニズム自体がネオヒューマニズムだということになりませんか？

**やすい**：ええ、ですから『経済学・哲学草稿』時代のマルクス疎外論にはネオヒューマニズム的傾向が見出せるのですが、人

間と事物の区別に固執する後期マルクスは、生産物や機械を人間とは認めませんから、現代ヒューマニズムは、巨大な政治経済的機構や、建造物や機械システムを、それが物質的外観を持つている限りで人間とは認められなくなってしまうたわけです。

**佐々木**：それでやすいさんは、国家や企業や組合などの組織体も人間であり、機械システムも人間として機能していることを認めて、その中で、個人がどう生きるべきかを考えようという構えなのですね。

**やすい**：個人として生きるだけでなく、家族としても生きるわけですし、組織体の構成員になれば、組織体の意識としても生きますし、機械を動かせば機械の意識としても生きるわけですね。核兵器を持てば、中国の国民の中に、日本が尖閣諸島を「侵犯」し続けるのなら、日本に核爆弾を投下したらいいなんて言い出す輩も出るわけです。

**佐々木**：ということはネオヒューマニズムになれば、恐ろしいことになりませんか。

**やすい**：いやそういう意味ではありません。今まで人間は身体的個人で核兵器は人間ではない爆弾ということでした。つまり人間自身は、核兵器ではないわけで、核兵器も人間ではない限り、意志も感情もない物体に過ぎません。ですから悪いのは帝国主義や軍国主義、ファシズムだということにきてきたのです。しかしそういう思想も恐ろしい武器が生産されているからですね、核兵器は気に食わない敵は絶滅させるぞという意志の物質

化であり、核兵器は絶滅の意志という思想を語っているのです。核兵器は核保有国という国家の非有機的自体に成っていて、だからこそ、核廃絶は困難を極めているわけです。

**佐々木**：要するに、環境問題でも、核問題でも人間の自己疎外として捉えられているにも関わらず、悪化した環境や核兵器を人間とは別物、他者として捉えてしまっている。だからその他者が巨大であったり、強大だったら、とても手に負えないと腰が引けてしまう。また他者だから自己自身の問題として捉えきれない。しかしネオヒューマニズムだといかに巨大で強大であっても、それが人間の姿であり、自己自身の状態なのだから、それを打開しなければ自分自身がますます追い詰められる。そして自己自身である限り、自己自身で主体的に取り組めば道は開けてくるということですね。

**やすい**：ですから、人間がいつまでも人間を個人の身体やそこに宿る人格に限定している限り、なかなか環境や安全保障やさまざまな経済的危機などを自己自身として取り組む主体の形成はできないわけで、社会的諸事物、環境的自然、様々な組織体、地域社会、国民国家、グローバル共同体と同一視できる発展的人格を形成しなければならぬわけです。そういう発展的な人格に相應しい人間観がネオヒューマニズムだということです。

**佐々木**：そういうことなら二十一世紀はネオヒューマニズムの時代にならなければならぬということですね。

**やすい**：幸い、まだ二十一世紀の思想というのは鮮明な形では

できていないので、ネオヒューマニズムは有望視されても不思議はないと思うのですが、どうでしょう。

## 6、宗教のときめき―三つの―

**佐々木**：ネオヒューマニズムと平行して、還暦を過ぎられてから急に宗教的感性が研ぎ澄まされてきて、宗教について『エッセイ集 宗教のときめき』をWEBに連載されていますね。特に最近「三つの― 光Light 命Life 愛Love」は宗教的普遍性なので、この三つの―で対話を進めれば宗教的和解が可能だと、宗教者に対話の勧めをされていますね。

<http://www.42.tok2.com/home/yasuyutaka/shoin/shuukyounotokmeki.pdf>

**やすい**：経済哲学研究家だった頃の保井温とは随分変わり果てたというように見られているかもしれませんね。しかし『人間観の転換―マルクス物神性論批判』で「つきもの信仰」という点でイエスとマルクスは共通することを発見しました。『資本論』では価値は「抽象的人間労働のガレルテ（膠質物）」と規定されています。

**佐々木**：ガレルテというのは要するに膠で、抽象的人間労働がそれ自身で固まって、生産物つまり使用価値にくっ付いて、ガレルテが透明なので、使用価値を価値に見せているということですね。

**やすい**：それがイエスの悪霊追放（エクソシズム）のパフォー

マンスもつきもの信仰なのです。それでその共通性からキリスト教に関心が強くなったのです。

**佐々木**：やすいさんの家系は日本聖公会で、やすいさんで四代目だということでしたね。

**やすい**：ええ、だから幼児洗礼を受けています。でも聖餐式でキリストの肉と血であるパンとワインをいただくには、堅信式を受けなければなりません。これは遠慮させていただいていきます。

**佐々木**：それはカニバリズムを連想されたからですか。

**やすい**：それ以前に、万物の創造主としての全知全能の超越神を信じると言われても、何を根拠にということ、納得がいきませんでした。だから教会に通っている信者も、牧師もみんな信じているふりをしているのかなと思っていたのです。

それで牧師さんに本当は信じておられないのでしょうかと尋ねたら、「自分は一生をかけて牧師をしているのだから、信じてもないのにどうして命を捧げて牧師ができるのですか」と言われたので、なるほどと思いました。その牧師さんは大主教にまで上られました。

別の牧師さんにも同じ質問をしたら、「ええ、なかなか信じられないので、苦しんでいます。でも祈りを捧げてないとむなししい気持になります。そうした気持させられるのはやはり神

のお導きかなと思つて牧師はやめられませんか」と言われた牧師さんはあまり出世されなかつたようです。

**佐々木**：自らの罪、不信仰を見据えることによって信仰するものが現代的な信仰ですね。キルケゴールなどはそうでしょう。その意味では後の牧師さんの方が親しみが湧きますね、

**やすい**：唯物論者の代表格であるマルクスでさえ、宗教的などころがあるわけですから、宗教性というのはかなり普遍的なところがあるなど感じたのです。それとは逆に宗教というと死後の生を保証してこそ宗教と思われ勝ちですが、実際はそうでないことが分かつたのです。

**佐々木**：死んだら地獄か極楽かというように宗教者も考えていないということですね。

**やすい**：『バイブル』は「人は塵だから塵に帰る」とは書いてあつても、天国に入るとは書いていません。パラダイスとかゲヘナ（地獄）というのは、歴史の終末が来てから、神あるいはイエスに甦らせられたららの話で、ずっと将来の仮定の話なのです。たんなる願望ですね。

**佐々木**：仏教の場合の輪廻転生や極楽往生はどうですか。

**やすい**：浄土真宗なんかは、阿弥陀仏が一切衆生を阿弥陀浄土に救い取るはずですから、死後の往生を信じていると思われでしょうが、それがどうもお坊さんは信じていない人が多いよ

うですね。直接本願寺に電話でうかがいますと、浄土を実体的に捉えなくてもいいというのです。つまり六道も浄土も生きている人の心の在り方だということですね。要するに死後の世界など死んでもいないのに分かるはずはないので、己の心に阿弥陀の浄土を持つていれば安心して生きられるではないかというわけです。

**佐々木**：それはそうですが、坊さんにはそれは言つて欲しくない気もしますね。

**やすい**：ですから宗教と言つても迷信の塊りではないわけですね。神道の神々などは太陽や水や嵐や星や蛇や石ころひいては疫病神までいるわけです。特に穀物神などは穀物が神なのです。要する命を与えてくれたり、日々の暮らしを成り立たせてくれている大切なものや、それに脅威を与えるものを神として崇め、祈つて、災いを防ぎ守護してもらおうという信仰なのです。それなら食事の度に「いただきます」と言つて手を合わせて感謝して命をいただく態度がそのまま宗教だということですね。

**佐々木**：神道といえは神棚なんか作つて祈りを捧げるものだから何か迷信くさいですが、原点到返つて見れば、生命の循環と共生の思想と大差ないということにも解釈できるわけですね。

しかし冷戦終焉後、これまで抑え込まれてきた文明間闘争が息を吹き返し、東欧やソ連で宗教がらみの民族間紛争が起こつて、ユーゴスラビアの解体やソ連崩壊をはじめ激動がおこり、中東紛争はますます混迷してきました。またオウム真理教のよ

うなカルト集団が、全人類の致死量のサリンガスを製造して、全人類にハルマゲドンを挑んでくるようなこともあったので、宗教の危険性というのが、改めて注目されているわけですね。

**やすい**：オウム真理教事件の衝撃は大きかったですね。ちょうど阪神淡路大地震が起こって、「縦揺れ」という言葉が流行っていました。私には、「オウム真理教事件」こそ「魂の縦揺れ」だと実感しました。二十一世紀は、カルト集団ですら、人類のサバイバルにとって重大な危険になり得る時代だということ、えらい時代になったなという実感ですね。

**佐々木**：まだ二十一世紀になっていませんでしたよ。

**やすい**：いや、一七八九年のフランス大革命から十九世紀に入ったという見方があるのです。それでいくと冷戦が終焉した一九八五〜一九八九年で二十世紀は終わったのです。あるいは近代の終焉と言ってもいいでしょう。それ以降がやすい式世界史では現代史です。グローバル統合の時代に入っているわけですね。オウムという小さなカルトですら、日本国内の革命戦争ではなく、グローバルな革命戦争をやるうという発想なのです。

**佐々木**：麻原彰晃は、世界救済計画と呼んでいたわけですが、旧人類を絶滅して、オウム王国を作るといいますから救済というより審判ですね。

**やすい**：「ヨハネ黙示録」的に神は、義の民のみを救済して、偶像や獣神を信仰していたみな滅ぼしたり、煮えたぎる血の池に

放り込むわけですね。それが黙示録では、救済＝審判なのです。キリスト教原理主義者の中には、あくまで「ヨハネ黙示録」的に救済＝審判に執着する人もいるわけで、そういう発想では、宗教的対話や和解は成り立ちません。

**佐々木**：オウム真理教が「ヨハネ黙示録」を使って「ハルマゲドン」を遂行しようとしたことに対して、キリスト教や「バイブル」の冒涜だという反発が起こりましたね。

**やすい**：誠に残念な反応ですね。「ヨハネ黙示録」の危険性をオウム真理教は実際に示したわけですから、キリスト教とすれば、「ヨハネ黙示録」を聖典から外すべきなのです。イエスがキリスト教徒以外を審判でホロコーストするという発想は、ローマ帝国やユダヤ教から迫害されていたヨハネたちキリスト教徒の怨念からでた妄想です。イエスは愛の神であるとするのなら、再臨されれば、間違った信仰から異教徒を回心させようとされるはずですね。

**佐々木**：そういえば、オウム真理教事件に関しては、キリスト教は被害者として振舞うだけで、決して反省はしていませんね。

**やすい**：宗教的対話というのは、宗教相互には共通性や影響があったところがあるわけですから、異教徒が起こした事件からも自分たちの宗教の欠陥を見出し、反省して、改革していくという姿勢によって成り立つのです。

**佐々木**：それではオウム真理教の残党を批判し、撲滅すること



に汲々としてはいけけないので、既成の宗教が自らの内なるオウム真理教と真剣に対峙すべきだということですね。

**やすい**：ですからまあ言えば上祐さんも、宗教活動を続けたいのなら、オウム真理教の救済＝審判の思想を徹底的に自己批判し、キリスト教などに対して、改めるように提言すればいいわけです。そうすれば彼も歴史の証人として存在価値を発揮できるでしょう。ただ彼が麻原のサリン製造計画に参与していなかったというのは、信じられませんが、だってナンバー2に相談しないで事を運ぶというのはいかにも不自然ですからね。

**佐々木**：オウム真理教事件は、新興宗教に大きな打撃を与えましたね。宗教と言うのはなにか怪しげだけではなくて、危険な臭いがあるわけですから。それで新宗連のシンポジウムに石塚正英さんとともにコメンテーターで参加されたんですね。

**やすい**：というより石塚正英さんが紹介してくださったのです。

**佐々木**：新宗連と言えば、立正佼成会やPL教団なども参加している新興宗教の連合会ですね。各教団の幹部クラスで行われたのですか。

**やすい**：ええ、準備会のために二度ほど上京しまして、問題意識をすり合わせたりしました。そこには教祖の孫とか、実質的に教団の中堅の人が来ているのです。そこにお手製のドラ焼きを持っていきまして、食べてもらったのです。

**佐々木**：食事を出す、ということは命を与えるということですね。そこに宗教の原点があるということを示されたのですか。

**やすい**：ええ、そういうことを含めて、宗教の役割を原点に帰って見直そうということですね。そうしたら宗教というのは、母親がドラ焼きを焼いて子供に食べさせるといって詰まっていますね。それは命を与えることであり、愛を与えることです。またそれは希望の光でもあります。おいしいものが食べられるというのは、生きる喜びであり、希望なのです。たとえ貧しくても、母親が心をこめてしっかり工夫を重ねて作ったドラ焼きは決して老舗のドラ焼きに引けを取りません。母親は元々自分の血液を乳に変えて命を与えていたわけですが、それと同じで、命をこめて食事を作って食べさせているわけです。

ですから教団もなんでもいいからそれこそ、団子でもいいですし、ワインやパンでもいい、その代り命をこめて作って、食べさせる、あのお寺にいけばうまい団子を食べさせてもらえる、それだけで人は集まるのです。

**佐々木**：しかしそれでは団子屋じゃないですか。

**やすい**：そうですね。団子屋だって宗教だということですね。愛を込め、命を込め、この団子が食べられて生まれてきて良かったと思わせるような団子を作ろうと団子屋が頑張っているのなら、それは立派な宗教ですね。

学校の先生だって金八先生ぐらい命がけでやっていたら、輝

いて見えますね。そういう宗教の原点を忘れて、旧来の教義や儀礼を繰り返すだけでは、ジリ貧になって当然なのです。人々は宗教に何を求めているのですか、魂が救われることでしょうか。カビの生えたような教義と形だけの儀礼では魂は救われないということですよ。

**佐々木**：でも教団に行つて、ご馳走になって帰ってきただけでは、信仰は広まらないでしょう。

**やすい**：いやそういう意味ではありません。哲学者に助言を求めているのですから、宗教の原点に帰ろうということ、その取っ掛かりに過ぎません。ドラ焼きにでも原点復帰のつかかりを見出すことができるという話なのです。誤解して、食べるものを出すことを改革の主眼と見られると困ります。

**佐々木**：要するにやすいさんの言われる宗教の原点というのは、日々の生活ですね。食べたり、着たり、住んだり、働いたりすること、自然との共生と循環に生きること、その一つ一つの立ち居振る舞いに、命をこめ、愛をこめ、希望を求めて生きていくか、その問い直しが宗教だとおっしゃりたいのですね。

**やすい**：残念ながら企業でだけではなく、学校でも、家庭でも人間は疎外されています、それがなかなかできていません。それができないので、宗教に求めているわけです。だから教団は、労働や学習や消費生活の疎外を癒す療養所のようなところではなければなりません。

**佐々木**：普段働いているのですから、日曜日に教会に来たときぐらい労働から解放させてくださいよ。

**やすい**：教会でも寺院でもそこで働くのはとても心が安らぐのです。なぜなら強制されない自由な労働ですし、庭の手入れや食事の支度、お掃除、ポスターやパンフレットの製作、聖職者の補助や代講などでしょう。あるいは日曜学校の先生とかもありません。祈りをこめ、創意工夫を凝らし、金銭的な損得勘定を離れてできるわけですから、働くのが楽しいわけです。

教会や寺院での学習も点数を競ったりするのではなく、自ら宗教的眞実を求めて学ぶわけですから、葛藤はあるでしょうが、疎外はありません。

寺院や教会での食事は儀礼的なものと実質的なものがあります。儀礼的なものはキリスト教会のパンとワインの聖餐です。これはイエスの肉と血をいただき、イエスと合体する儀礼です。実は仏教も法と一体化した仏陀は森羅万象になって現われるのですから、食事も御仏をいただくことになります。神道では穀物などの食物それ自体が神であるという性格を持っています。ただキリスト教とは違って、仏教や神道では調理や食事自体のレベルが求められません。上賀茂神社では焼餅が名物で今はお店がやっています、元々は神社がお供えにし、それを振舞っていたのでしよう。とてもおいしいのです。大徳寺などの精進料理は日本料理の原点と言われるぐらい洗練した味を出しています。

教団では人を集め、いろんな行事を催すことで、寄付が集まり、財政的に潤うことになります。説教でもその他の行事でも

集まった人に食事をふるまい、満腹感を与えることで、説教や儀礼が堅苦しいものでも、喜んでもらえるということは大いにあるようです。生理的にも満足させるということは、大いに疎外からの癒しになるものですから、どうせ食べさせる限り、どこにも負けない味を出すように工夫して、名物料理にすることが大切なのです。

**佐々木**：教団の中で本来の生活を取り戻し、その気持を普段の職場や学校や家庭の生活に戻していくと、疎外の軽減になるということですね。

**やすい**：もちろん職場や学校や家庭に疎外があるのですから、そこでの問題に取り組み、解決していかなければなりません。そのためにも教団で充実した時がすごせるようにすれば、命の洗濯という魂がきれいになって、現実にも立ち向かえるようになるわけです。

**佐々木**：宗教を見直す上で、やすいさんはどの宗教も「三つのL」という共通点があるので、この三つの「Light Life Love」について対話をおしすすめたらどうかと提言されています。

**やすい**：宗教を論じるとき、断絶面が強調されやすいわけですね。唯一絶対の超越神と、日本の神道のような八百万の神々を比較しますと、全く発想がかけ離れていて、対話など成り立たないように見えますね。

**佐々木**：そうですね、やすい説によると元々唯一絶対の超越神

信仰は、多神教を神を冒瀆するものとして、撲滅するために作られた宗教だということでしょう。

**やすい**：いや私の考えでは、多神教を神を冒瀆しているとして、撲滅させてもよいような教義になってしまったのは、唯一絶対神を祀るヘブライ人が、潜在意識の中で、カナンの地を奪って、侵略するために、その行為を正当化できる宗教が欲しいという衝動があつたのではないかと思うのです。つまり無意識にそういう教義になってしまったということですね。

**佐々木**：超越神論はフェティシズムの神観念をひっくり返したものであって、本当は、相補的なのでしょう。フェティシズムでは人間が神を指定し、ありふれた物を神にし、願い事かなえられなければ、神を攻撃し、破壊します、人間の奴隷としての神ですね。それに対して、超越神論では、神が天地や人間を作り、人間は神のために存在し、神の奴隷にすぎません。絶対的な力を持つ神を褒め称え、神のために命まで捧げてこそ、神の恵みがもたらされるということですね。

**やすい**：唯一絶対の存在を神にしてしまったら、他の大切な自然存在、太陽や大地や河や海や獣や穀物や樹木やそういう人々の命を守り、育んでくれていたものが神ではなくなってしまうわけですね。それで多神教との断絶が生まれます。

**佐々木**：しかし人間は元々、三つの「Light Life Love」を求めて生きていないことには変わりはないから、その面ではどの宗教も共通するのではないかというわけですね。

**やすい**：Light、イエス・キリストは「世の光」と言われます。ルシヤナブツも大日如来も阿弥陀仏も宇宙の隅々まで照り輝く光という意味なのです。そして多神教でも太陽神が主神の場合が多いですね。

**佐々木**：それに光はすべての物質の元みたいに思われていますね。そして光は希望のシンボルですし、感情としては愛です。そして光によってすべてが明らかになるので、光は理性を意味しますね。

**やすい**：王陽明は遺言を求められて、「この心は光明であり、何を言い加えようか」と言って目を閉じたそうですが、深いですね。

宗教的儀礼では光を効果的に使うことに心を砕いていますね。光を効果的にするには、闇を照らすようにするために、宗教儀礼は、室内が多いですね、室外では闇の中に灯明を効果的に配置します。

**佐々木**：Life 命というのもイエスは死に打ち克った永遠の命です。だからイエスの肉と血に預かって永遠の命につながる事ができるということになります。阿弥陀仏も無量寿で永遠の命を意味するわけです。

**やすい**：ただ個体的には人間は有始有終で、有限性は免れませんが、いかに個体を超えた大いなる生命の共生と循環を自己自身

として覚えることができるかということが宗教の大きなテーマで、宗教的対話が期待されますね。

**佐々木**：この個体の命といっても、それは意識としては宇宙でもあるわけですから、大いなる命は決して外にあるだけでなく、内にも流れているということでしょうね。

**やすい**：Love 愛が宗教の大きなテーマであることは、当然でしょう。キリスト教は愛の神を表看板にしていますし、仏教では仏の慈悲を強調します。各国の神話でも一對の夫婦神が性愛によって子供を生むだけでなく、豊穡をもたらすわけです。それは決して、現に生きている我々の夫婦生活の別のことではなくて、命を生み育て、自然を守り環境を開発し、保存する営みの根本は、夫婦の愛にあるということを表していると解釈できるでしょう。

**佐々木**：愛に等級をつけたり、閉鎖的になったりしますと、そこに排他的な感情が生まれ、憎しみに転化しますね。愛が深ければ深いほど憎しみも増幅し、争いが絶えません。ですから憎しみや争いの問題も愛のあり方の問題であり、宗教間、民族間の争いも愛のあり方の問題として、宗教間で対話すべきでしょう。

**やすい**：ユダヤ教とイスラム教の対立の根源も、アブラハムの家族の問題なのです。正妻サラが、嫡男イサクを偏愛して、奴隷女のハガルが生んだイシマエルを砂漠に追放させたという問題にまで遡って、反省し、和解しなければならぬのです。

佐々木：ええ、そんなの作り話でしょう。それが感情のしこりとして現在まで残っているのですか。

やすい：ユダヤ人やアラブ人の中では『バイブル』や『くるアーン』の言葉は生きていますから、たとえ作り話でも、それがあつたこととして反省する必要がありますね。ユダヤ人はカナン人に対するホロコーストを遺跡調査の結果で否定しますが、彼らが信仰している『バイブル』では生々しい事実ですから、もしあつたとしたらそれは大きな過ちであつたと真摯に反省しなければ、ナチスのユダヤ人大虐殺を非難する資格はありません。

## 7、ファンタジー人間論の大冒険

佐々木：次に取り上げたいのは、『ファンタジー人間論の大冒険』<http://www.42.tok2.com/home/yasuyutaka/shoin/daihouken.pdf>ですね。できれば『長編哲学ファンタジー 鉄腕アトムは人間か?』も一緒にお話願います。

<http://www.42.tok2.com/home/yasuyutaka/shoin/atom.pdf>

やすい：大学の哲学や倫理学の講義で人間論を教えるのに、どうすれば古今東西の人間論を講義できるかという問題があります。あまり難しい講義だと内容が理解できませんので、できるだけ易しく、かつ興味を持てるようにと『ソフィーの世界』を参考に、哲学ファンタジーを創作して、それを教材にすること

にしたのです。

佐々木：そういえば、やすいさんたちは大阪哲学学校の仲間と『ソフィーの世界』の『世界』を青木書店から出されましたね。

やすい：ええ、『ソフィーの世界』を翻訳された池田香代子さんには、私が手紙を書きまして、参加してもらったのです。ヨースタイン・ゴルデルがファンタジーの中に挟みこんでいる哲学史自体はたいしてオリジナリティはないし、哲学自体に対する問いかけがないので、物足りないという田畑稔さんたち哲学批判派と、ファンタジーを楽しみながら哲学史を学習していくという試みはいいじゃないかという我々哲学擁護派に分かれて論争するという内容の本でした。

佐々木：マルクスの立場を一つの哲学と見るか、脱哲学と見るかという論争とも絡んでいて、哲学か反哲学かは、未だに決着はついていませんね。

やすい：哲学の定義の問題でもあるわけですね。物事を根底的捉え返し、一つの原理で一貫した論理で誰もが納得できるように展開する試みとか、そうしようとする態度が哲学だというのが、我々の哲学擁護派の立場ですから、マルクス自身が哲学に對して批判的であつたことと、マルクス自身が哲学者であつたこととは必ずしも直接結びつかないのです。

佐々木：マルクスの『資本論』は剰余価値理論を商品 貨幣 資本という価値の発展として一貫した論理で展開していますか

ら、それは論理学として読めますから、哲学ですね。実証科学としては、統計的な裏づけがなくて、どの程度現実を説明できるのかは疑問がありますが。

**やすい**：反哲学派のマルクス観は、頭の中で作り上げた理念や図式にそって現実を解釈したり、説明したりするのではなく、しっかりと実事求是で現実から学んでいく科学的な立場を追求したということでしょうが、資本の論理によつて資本主義は展開されますし、それを哲学と呼ばないというのは、我々の哲学概念からはおかしいわけです。

**佐々木**：マルクスはさておき、哲学ファンタジーとして哲学や人間観を展開するのは何か理由があるのですか、ファンタジーにすることで、説明が分かりやすくなるということのほかに。

**やすい**：ひとつは『ソフィーの世界』は素晴らしい成功だったわけですが、不満だったのは、ファンタジーと哲学が分離されていて、哲学講義は教科書的な内容で挟み込まれていたということです。物語の展開が哲学の展開であるとはあまり感じられなかったことです。もちろんソフィーが現実だと思つたのが実は、アルベルト少佐の創作だったとか、アルベルト少佐も実はフィクションで、ゴルデルの作品だったという「入れ子構造」自体は、リアルとバーチャルの捉え方が弁証法的に転化して哲学的ではありませんが。

**佐々木**：やすいさんは自作のファンタジーで、哲学や人間学を物語の中身で展開しようとされたわけですね。それからプラト

ン作『プロタゴラス』の中でソフィストの元祖プロタゴラスは、「徳は教えられるか？」という問に「プロメテウス神話」を創作して、人間の本质をうまく説明しています。やすいさんのファンタジーも、いろんな人間論をそれぞれ語りやすい物語の場面を設定して、読み手が納得しやすいようにするねらいがあるのでしょうか。

**やすい**：ええ、神話だってプロタゴラスの神話は話術の一つです。決して信仰表現ではないのです。確かにファンタジーは人間論を展開しやすいようにするための方法ですね。

それから冷戦終焉後は、平和になつて安定するとおもいきや、それまで冷戦下で抑え込まれてきた文明間闘争が激しくなり、かえつて一寸先が闇のような手探り状態が続いています。まるで夢想の中にいるような次に何が起こるか分からない状態です。これはファンタジーで表現するしかないのかもしれないかもしれません。

**佐々木**：ファンタジーといつてもどういう型のファンタジーにするのかということですが、小説の場合はありそうな世界をフィクションで表現するのに対して、ファンタジーはありそうな世界ですが、『ナルニア国物語』の場合は、筆笥の中からナルニア国に通じているわけです。

『人間論の大冒険』の場合は、電脳空間でのバーチャル・リアリティ劇という設定ですから、そういう空間にどうして入るのかと思つたら、パソコンの画面に吸い込まれるといういかにもWEB時代に相応しい入り方ですね。

**やすい**：もちろんWEBの画面に吸い込まれるなんてあり得ないわけですが、まあWEB人間の時代ですから、比喩的には吸い込まれているようなものですね。そこでバーチャル・リアリティ劇という創作世界に入り込むわけです。全くのフィクションなのですが、そこに入っている人間にとっては、現実としか思えないのです。ですから登場人物の上村陽一君、三輪智子さんはまだ高校生なのですが、突然、とんでもない命がけの状況や、忌まわしい不幸な境遇に投げ出されたりして、別の人間の人生を体験するという設定です。

**佐々木**：電脳空間に入った陽一君は目覚めたら二十四世紀で鉄腕アトムになっていたというのが第一話ですね。長篇は『鉄腕アトムは人間か?』だけになっています。『人間論の大冒険』ではギルガメッシュ王、アダム、オイディプス王、プロタゴラス、エラムスム、これは陽一君がエラムスムの時に智子さんが痴愚女神モリアになっています。それから『虚航船団』のコンパスとか、ヤマトタケル、本居宣長、ツアラトウストラ、若き榊周次、西田幾多郎など多彩ですね。しかし昨日まで高校生だったことが邪魔して、いきなり自分は鉄腕アトムとは思えませんよね。

**やすい**：ええ、ですから自分が上村陽一だったという記憶は催眠術で一時忘れさせられているわけです。そして周囲の登場人物の言葉や、自分の姿を見て、鉄腕アトムだと思ひ込むということですね。

**佐々木**：本当は催眠状態にあるわけで、バーチャルな画像を見

せられているわけですが、スクリーンに映し出された画像を完全なリアルとは思えないでしょう。

**やすい**：そうですね。ですからスクリーンを使わないで、直接脳波で映像を送り込み、リアルとしか思えなくするわけです。

**佐々木**：脳波に映像を変換できるのですか？

**やすい**：既に頭の中で考えただけで、パソコンのキーを操作できるようにする研究が進んでいるようで、脳波と意識の密接な関連については相当研究は進んでいるようです。しかし実際から脳波信号を送って、それをリアルとしか思えないようなバーチャル映像として見せることができるようになるには何百年もかかるでしょうね。

**佐々木**：するとこのバーチャル・リアリティ劇には相当無理がありますね。榊周次先生が制作することになっていますが、彼は陽一や智子さんの出演を誘っていますね、バーチャル・リアリティ劇は不可能と分かっているはずなのに、矛盾しませんか？

**やすい**：ええ、大いに矛盾します。ただ、榊周次はバーチャル・リアリティ劇を演出する側です。ところがもしも本当に榊がバーチャル・リアリティ劇を演出できるのかというと、現在の技術では無理です。ましては榊自身自分のエトスキルは幼稚園児並みだと言っているのです。

**佐々木**：ということとは、榊は自分は実は物語の登場人物にすぎないことを知っていて、バーチャル・リアリティ劇というのは、ファンタジーの設定にすぎず、陽一や智子がバーチャル・リアリティ劇に出演することを知っていて、そう言っているということですね。

**やすい**：物語の登場人物が物語りだと分かっているのは本当はまじいわけですが、そういう設定の物語がけっこうあるのです。というのは、榊は、バーチャル・リアリティ劇を作るという役柄を演じているわけですから、作者の分身的な役なのです。ですから、榊は作者に成り代わったような語り口になることがあります。

**佐々木**：つまりバーチャル・リアリティ劇という設定は、ファンタジーとしてなら展開できますが、バーチャル・リアリティ劇を本当に上演して、映像化したり、バーチャル・リアリティ体験を現実に生み出すことはできないわけですね。ところが陽一や智子は自分たちがファンタジーの登場人物だと分からないものだから、バーチャル・リアリティ劇をリアルに体験する劇を演じることになりました。

**やすい**：あり得ないことが起こることによって、自分たちがリアルの世界に生きていたと思いついていたのに、実は作家の思念の展開でしかないことが分かるという設定です。

**佐々木**：それは『ソフィーの世界』と同じですね。二番煎じじゃないですか。

**やすい**：ええ、パステイシュー（模倣）によって「ソフィーの不安」を思い出してもらおうとしているわけです。

**佐々木**：リアルと思っていたこの世界が実はバーチャルではないか、だれか作家の思念の「こまに過ぎないのではないか」という不安ですね。

**やすい**：別にあり得ないことが起こらなくても、存在は本質的に不安ですね、だって存在は無と裏表です。生は死と裏表ですから。豊臣秀吉は「露と落ち 露と消えにし 我が身かな 浪速のことは夢のまた夢」という辞世の歌を遺したのですが、過ぎ去った思い出というのは、既に観念になってしまっているので、本当にリアルだったかどうかというのは遺物からの推量にすぎません。遺物の大坂城も死後十五年で燃え落ちてしまいますね。

**佐々木**：なるほどだから、むしろ仏の思念や、神の被造物と考えることで、「ソフィーの不安」を大いなる存在の中に自己の存在を位置づけで確かなものにしようとするのが、宗教であり、観念論的な哲学の試みだということですね。

**やすい**：ファンタジーは夢想の世界をリアルとして体験する夢想談です。それはリアルの世界を夢想だと覚る観念論哲学や宗教と通じているわけですね。それは常に死と背中合わせて生きている生のはかなさの表現でもあるわけですね。

**佐々木**：ということはやすいさんも観念論哲学の軍門に降った



ということでしょうか。

**やすい**：勝った負けたの問題ではなくて、唯物論を択るか、観念論を択るかは、哲学の根本問題と言われていたわけですが、意識と事物を二元論的に捉えたうえで、どちらを根源的に捉えるかという問いの次元ですね。意識を生じさせる基盤としての物質を根源に捉えなければ、社会的現実が捉えられないという意味では唯物論が正しいわけです。しかし他方で物事の認識は、原理の自己展開として理念の現われとして展開されなければならぬという意味では、観念論が正しいのです。

そして意識と事物は、認識としては主観・客観的な関係において対置されているけれど、存在の現われとしては、意識経験として体験されるのであって、それが生きているということ、命の実感なのです。

ということで、「哲学の大樹」の中でいろんな哲学的立場を、それぞれ有効な範囲を限定して、統合するというのが私の立場ですね。

**佐々木**：どっちつかずで中途半端な折衷主義という批判を受けそうですね。

**やすい**：なんでもありというのでは納得いかないという批判は受けていますね。ある立場を選択して、他の立場を斥けるというのが思想であり、哲学であるという人もいますからね。しかし古今東西の哲学を総合して、「哲学の大樹」を示すことができれば、それぞれの人が自分の思想や哲学の正しさを確信しつつ、自らの狭量と無知を覚って、学ぶことの喜びを実感できるので

はないでしょうか。それが究極の目標ですから、中国思想史講座も三巻書いたわけです。もちろん一人で目標を達成しようということではなくて、そういう方向性だけでも示しておこうということですね。

**佐々木**：ところで『人間論の大冒険』ということで、展開された人間論の中身もうかがっておかないと。『鉄腕アトムは人間か？』というのは題名から察して、人間を生物の一種として捉えるのではなくて、自己意識を持つ知性体であれば、たとえ機械であつても人間だという機械人間論ですか。

**やすい**：ええ、その論点も含めまして、ネオヒューマニズムの人間論を展開したわけです。人間の科学の目標は、人間を創造することにあるわけで、ロボットの開発は人型を進化させ、やがて自己意識をもたせようとしています。

**佐々木**：手塚治虫は二〇〇三年に鉄腕アトムは誕生するつもりでしたが、はたして自己意識あるロボットを作るとは原理的に可能なのでしょうか。

**やすい**：自己意識のない動物から自己意識のある人間が発達してきたわけですから、ロボットが進化すれば自己意識を持たないとは言いきれません。

**佐々木**：生物と無生物の機械では全く条件が違います。やはり死というものがあるので、自己の存在に目覚めるのではないのでしょうか。

**やすい**：哲学的に言いますと、デカルトとホッブズの対立があります。両者の共通しているのは動物は内燃機関をもつ自動機械だという考え方です。デカルトは動物機械が如何に発達しても、言語を自由に操れるようになるはずはないと考えました。だから、人間は身体は自動機械だけれど、人間の魂だけは、神が特別に詠えたので、身体機械に精神的実体である魂が置き入れられているというのです。精神的実体は量的に認識できるようなものでないので、認識対象ではありえないわけです。だから人間は精神的実体である魂は原理的に認識できないので、作ることも絶対にできません。

**佐々木**：それに対してホッブズは、自己意識あるロボットをつくることができるという立場だったとやすいさんは解釈していますね。

彼は、イギリス経験論ですから、実験・観察して確かめられたものだけを根拠に展開することが大前提です。ですから神が創って置き入れた靈魂というのは、質量も大きさも分からないので認識できませんし、実験・観察できないので、人間が作ることはできないものです。そういう存在はイギリス経験論では全く相手にされません。ホッブズでは、言語能力も人間の身体機械の機能なのです。音声のイマジネーションを他のイマジネーションの記号とすることによって言語が使えるようになったのです。つまりホッブズは靈魂を身体機械の機能として捉えていましたので、人工の人間も作ることができると考えていました。そしてそういう人工の機械人間が実際に存在するというのです。

それがリヴァイアサンと呼んだ国家です。

**やすい**：ただし、国家の場合は別にして、生まれつき自己意識あるロボットは作れません。ですから、鉄腕アトム一世が二十世紀に誕生したとき、「天上天下唯我独尊」と語ったといいますが、決して自己意識から自己の思想を語ったではありません。誕生つなかりで、釈迦誕生の言葉が機械的に出てきただけです。人間たちは鉄腕アトムは、危険な思想を語ったと勘違いし、故障とされて、何もしないうちにお釈迦(スクラップ)にされてしまったのです。という話を作ったのですが。

**佐々木**：いかにたくさん記憶をインプットされていても、それは体験ではないので、まだ人格は出来上がっていません。やはり実生活での経験によって自己意識が形成されると考えた方が分かりやすいですね。ただし、価値判断は感情生活が基礎になるでしょうから、ロボットにも喜怒哀楽の元になる快樂と苦痛という感覚の仕組みがしっかりしていないと人格形成はいびつになるでしょうね。

**やすい**：ええ、ですから自己意識あるロボットにするのでしたら、機能第一ではだめですね。つい、ロボットにはインプットされてあるプログラムをこなして完璧な仕事を期待する向きがあります。それは機械的な動作しかできない自己意識のないロボットなのです。人間と心を通わせて、愛情で結ばれるようなロボットは、感情豊かなロボットでないといけませんから、しっかり快樂や苦痛を感じ、自ら欲望を持って、それを理性でコントロールできるようにすべきです。

**佐々木**：その点、愛人ロボットは、相手を感じさせるだけではなく、自分がその状況では体液に特別の液体を分泌して、それをセンサーで快感として感じる装置になっているとか、説明が凝っていましたね。土のにおいに快感を感じるように工夫した農夫ロボットという発想もおもしろかった。

**やすい**：ええ、ロボットは人間に近づけようと、どんどん生理的なものまで人間的になっていきます。それに対して、人間はロボットにおんぶにだっこになって、次第に人間性を喪失していくという逆転が起こります。ロボットの俳優の演技の方が人間らしいし、人間の俳優の演技の方がぎこちないわけですね。

**佐々木**：それが表面的にだけではなく、感情面でも心自体がロボットの方が豊かになっていくということですね。ところがロボットは商品生産されることで、奴隷として扱われ、人権がない、人間は新製品のロボットを売るために、古いロボットをスクラップしようとして、結局ロボットの叛乱になってしましますね。それで鉄腕アトムが国連の対ロボット戦争の戦略首脳会議をミニ核爆弾で攻撃するように指令されるという話ですね。

## 8、熟年よ、今、歴史がおもしろい。

### くすのき塾歴史講演集

**佐々木**：富田林市の熟年文化講座『くすのき塾』での講演集『熟年よ、今、歴史がおもしろい。くすのき塾歴史講演集』がありますね。

<http://www.w42.tok2.com/home/yasuiyutaka/shoin/kusunoki.pdf>

**やすい**：ええ、梅原猛論を研究してましたので、古代史についていろいろお話できるネタがあったのです。なかなか思想関係の講座はまだないので、歴史講座になったのです。

### 目次

#### 歴史の玉手箱

- 1 持統天皇は怖い女か？
- 2 聖と俗の狭間にゆれて

#### クリスマス講演

- 1 イエス復活の謎

#### 聖徳太子シリーズ

- 1 聖徳太子は架空の人が
- 2 聖徳太子の夢

ヤマトタケルと神功皇后

白鳥伝説でのつながり

前編 ヤマトタケル伝説

後編 神功皇后伝説

怨霊信仰とのかかわりで

1 大國主命について

2 平城天皇の哀しみ

**佐々木**：持統天皇が怖いという印象はありますね。彼女は息子の草壁皇子に天武天皇の後の皇位を継がせたかったので、ライバルの大津皇子を謀略で乱に追い込み殺したといわれています。そして、草壁皇子が病弱で継げないと、高市皇子に継がせないで自分が天皇になり、しまいに高市皇子を毒殺して、孫の軽皇子(文武天皇)に自分の皇位を継がせたのです。それに梅原猛によれば、柿本人麻呂を粛清したのも持統天皇だということになります。

**やすい**：それは母親は自分の腹を痛めた子供に権力を引き継がせようとするものだという、母性本能で歴史を説明しようする説です。実際、自分の子に帝位を継がせるために血なまぐさい事件を引き起こした例はいくらでもありますから、説得力はありますが、邪推の域を出ません。

大津皇子の変は、唐の太宗の影響を受けて、大津皇子がクーデターを起こすように唆されて、乗せられた事件ですね。その

謀略は、鷗野皇女(後の持統天皇)の気持を察して企てられたかもしれませんが、謀略に彼女が加わっていたというのは邪推でしょうかありません。

高市皇子の毒殺は毒殺であったかどうかも定かではありませんし、これも持統天皇の気持を察して企図されたことはあり得ても、持統天皇自身が計画に加わっていたという根拠はありません。

**佐々木**：持統天皇の冷酷な性格を説明するのに、父である中大兄皇子が、祖父蘇我石川麿を冤罪で追い詰め、自害させた事件を上げる人が居ますね。この事件でショックを受けた母遠智媛は気がふれて死んでしまいます。つまり実父祖父と母の仇なのです。その憎いはずの父の意向で姉大田皇女と共に大海人皇子に嫁いでいるのです。これは、中大兄皇子と大海人皇子の仲を取り持つとともに、滅びかけていた蘇我氏の血統を皇室に残そうとした蘇我氏の思いを受けたものです。こうした生い立ちから、彼女の目的のためには何でもするというマキャベリズムの性格が形成されたと説く人もいます。

**やすい**：そのような肉親間の争いを幼い時から経験すると冷酷な性格になることも考えられますが、反対に和を大切にし、慈悲の心を持たなければならぬことを肝に銘じることと考えられます。ですから成人後の彼女の周辺で起こった血腥い事件を、彼女の不幸な生い立ちからくる冷酷な性格に求めるのは、かなり不幸な生い立ちの人に対する偏見を煽る説であるといわざるを得ません。

**佐々木**：なるほど、でも壬申の乱では弟大伴皇子が殺されても平然としていたようですし、そういう鉄面皮だったという材料がそろいすぎています。

**やすい**：いやそれは歴史小説に描かれた持統天皇の姿でしょう。持統天皇は怖い女だという先入見があるから、そうだっただろうと邪推しているだけです。姉大田皇女に先立たれた時も、これで皇后になれるとほくそえんだということになります。しかし、私に言わせれば、たとえ本性はそうだったとしても、そうは見られないようにしたはずだと思います。姉が死に、弟が死んでも笑っていた女なんて、大海人皇子にしたら絶対に嫌ですよ。そんな女を皇后にはしたくないでしょう。

自分の息子を帝位につけるために甥を謀略にかけて殺す皇后を、他の皇子たちはどうみるでしょう。彼女を慕って、彼女の許で団結して、吉野の誓いを守ろうとするでしょうか。

**佐々木**：それじゃあ、演技として、姉が死んだときはおろおろし、弟の遺骸には縋り付いて泣いて、大津皇子の悲劇には最も激しく嘆き悲しんだというわけですね。なかなかの名女優だったとすると、それこそ怖い女じゃないですか。

**やすい**：ですから鉄面皮の性格で、表面だけで演技していても、どういふ性格の人間かは日常の態度に表れますから、普段から彼女は心優しく、感情細やかで、愛情深い性格だと思いがちだと思えます。ということは、それはもう演技ではなくて

性格になっていたということです。心の奥底の闇の中にあるいは父を激しく憎んだり、夫を父の仇と思っていたかもしれませんが、それはあくまで潜在意識の中です。彼女自身が、吉野の誓い通り、公平な母として草壁皇子以外の皇子にも愛情を注いでいたからこそ、皇子たちに推されて天皇にもなったわけですね。

**佐々木**：なるほど、フロイト心理学を応用すれば、そういうことになりますかね。それにしても皇位継承で彼女のゴリ押しが功を奏しているようですが。

**やすい**：実は彼女が草壁皇子を皇太子にすべきだと主張したという記録はありますが、皇太子は母親の血筋や、年齢順、そして本人の器量で決まります。別に彼女が口出しをしなくても、草壁皇子に決まっているわけですね。

孫への皇位継承も皇子たちの合議で決まったわけで、特に彼女それをゴリ押ししたという記録はありません。それより、草壁皇子が亡くなった時には、高市皇子に皇位継承を勧めたと思われまます。

**佐々木**：その根拠はあるのですか。

**やすい**：それは後皇子尊という尊号が高市皇子に贈られているからです。これは皇太子に近い意味に解釈できますね。勝手に高市皇子が名乗れるような呼び名ではないですから、天皇になった持統天皇がつけた呼び名だと考えるべきです。これは称制

を行なっていたけれど、草壁皇子が亡くなったので、次の天皇をだれにするか決めなくてはならなくなつて、高市皇子に交渉した結果、高市皇子に辞退された結果だと考えられます。

**佐々木**：どうして辞退したのですか。

**やすい**：大津皇子の事件では、大津皇子に乱を唆した連中はすべて無罪放免になっていきますね。

**佐々木**：ええだから、大津皇子は、皇后の罠に嵌つたと言われているわけです。

**やすい**：でもそれなら当時も皇后の謀略と受け止められたはずですね、ところがそうではなかった。謀略は確かにあつたけれど、それは皇后の罠ではない、と高市皇子は受け止めていたのだ、もし自分が皇位を継承しようとすれば、謀略の黒幕の魔の手が動いて、大津皇子のように葬られるのではないかと警戒したのでしよう。闇の手が動いているので、下手に即位しようとすれば、殺されるかもしれない、それで自分は太政大臣になつて父天武天皇の皇親政治を推進するので、皇后が即位してくださいと譲られてしまったと考えられます。

**佐々木**：皇后でなければ藤原不比等しか考えられませんね、謀略の犯人は。

**やすい**：不比等は、大津皇子の変の時はまだ役人になっていないので、高市皇子がどれだけ知っていたか分かりません。まだ二

十七歳ほどですから謀略の黒幕になれたかどうか、定かではありません。ただ中臣氏としては、何とか復権を狙つて、不比等を持統天皇に近づけようと、様々な謀略をしていた可能性はあるでしょう。

**佐々木**：不比等が実は天智天皇の落し胤だというのは本当ですか。

**やすい**：それはあり得るといえます。なぜなら藤原京といいますが、本当は当時は新益京（あらましのみやこ）と呼ばれたらしいのですが、宮殿はやはり藤原宮と呼ばれたようです。それが藤井が原という藤が茂った井戸があつたので、その周辺を藤井が原と呼んでいて、それがつまつて藤原宮と呼ばれるようになったようです。

**佐々木**：それじゃあ、藤原氏とは関係ないですね。

**やすい**：もし藤原不比等に対して好意というか、親しみの感情がなかったら、藤井宮と呼んでいたでしょう。藤原にしたのはやはり不比等に対して特別の感情があるからではないでしょうか。

**佐々木**：もう天武天皇はいないですから、寵愛的な関係ですか。

**やすい**：だから天智天皇の落し胤で、実の弟だとしたら、帝位に就けてやれない代わりに宮の名前にしたことは考えられます。それ以外に臣下の氏を宮の呼び名にするのは変ですからね。

**佐々木**：なるほど、藤原不比等が落ち目だった中臣氏出身なのに、才覚がすごいとはいえ、たちまち皇親政治から藤原氏による貴族官僚独裁に変質させていったのは、そういう事情があったからなのですか。

**やすい**：中臣鎌足の知略遠謀ですね。中大兄皇子のお手つきの女性から妊娠してそんな女性を身請けさせてもらって、自分の妻にする。落し胤が男なら鎌足の子として育てるということです。遣唐留学僧になった兄定恵も孝徳天皇の落し胤でしたね。同じやり方なので、梅原先生は弟の方は違うのではないかと言われていたのですが、藤井が原が藤原宮の呼び名の元だった話などをしますと、なるほどあり得ないことはないと言われていました。

**佐々木**：でもそれが本当たしたら、鎌足の子孫ではないことになりませんか、藤原氏は。それじゃあ、鎌足は名前だけの祖先で、藤原氏の祖先は中大兄皇子だったことになります。

**やすい**：もちろん不比等を使って宮中工作をやらして、中臣氏の勢力を強化しようという目論見だったのでしょう。まさか藤原という氏を不比等の直系に限って、政権の中樞を藤原氏が独占するようになるとは、鎌足はそこまで予測していなかったでしょうから。でも名前だけでも鎌足の子孫の貴族官僚独裁にするというのは、鎌足の理想の実現と言えるでしょう。血は世代ごとにどんどん薄くなっていきませんが、名は変わりませんか。

**佐々木**：次に柿本人麻呂との関係ですが、人麻呂を寵愛していたという事は本当でしょうか。

**やすい**：それは分かりませんね、それはあってもおかしくないでしょう。人麻呂は持統天皇の吉野行幸に従って、女帝の側で天皇を神と讃える歌を作っています。

**佐々木**：それがどうして柿本人麻呂は持統天皇の逆鱗に触れたのですか。

**やすい**：それが実ははつきりしていません。高市皇子の挽歌に添えられた短歌にこうあります。

「ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに日月も知らず恋ひ渡るかも」

「高市皇子は亡くなって、いまでは天に帰って天を支配している、そういう君だから、私は日月のことは忘れてしまつて、高市皇子を恋しく思っています。」という意味になるでしょうか。問題は「日月も知らず」という表現にあります。これは「時の経つのに気がつかず」という意味ですが、日は持統天皇を月が草壁皇子を意味していたのです。草壁皇子への挽歌で

「あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも」と歌いました。

つまり「持統天皇は御健在で、太陽として世を照らしておら

れるが、暗闇の夜は、それを照らす月のはずの草壁皇子が隠れてしまわれたので、惜しいことだ。」と嘆いているのです。これを歌った人麻呂ですから、「持統天皇や草壁皇子のことなど忘れて高市皇子を恋しく思っています。」ということになります。これでは持統天皇は快く思わないでしょうね。

もちろん、草壁皇子の死から数年経っていますから、日月を  
持統天皇 草壁皇子という意味は忘れてしまっていたかもしれ  
ません。もちろん人麻呂は、うっかりしていたので、日月を不  
用意につかっってしまったのです。そんな天皇とその嫡男をシカ  
トしたような歌を宮中でわざと作れるはずはないのです。

**佐々木**：つい本音を漏らしてしまったということですね。

**やすい**：それは言えるかも知れませんが、柿本人麻呂は天皇の神  
格化に歌で貢献していたわけですが、天皇が神であって欲しい  
という気持は持っていたのでしょうか。ところが草壁皇子や軽皇  
子は腺病質で、帝にならなければならぬことに対して、重荷  
のような感じなのです。他方、大津皇子や高市皇子は文武に優  
れ、志が気高いように見えたのです。そういう才覚ある皇子た  
ちを排除して、わが子、わが孫に皇位を継承を望まれているよ  
うに見える持統天皇には幻滅したかもしれませぬね。

**佐々木**：と言うことは、持統天皇は、柿本人麻呂には母や祖母  
としての本音を漏らしていたということですか。人麻呂を寵愛  
していたのなら、人麻呂には本音が漏れたことも考えられます  
ね。

**やすい**：いや、彼女はそういう意識を無意識に抑圧して、公平  
で和を尊ぶように振舞っていたので、つい人麻呂にだけその反  
対の本音を漏らすことはあり得ません。もう本音まで優しい女  
帝になっていたのです。人麻呂は持統天皇を誤解してしまっ  
たのです。持統天皇にすれば、大津皇子の変も、高市皇子の変死  
にもまったく謀略に加担していなかったため、全く邪推であり、  
濡れ衣だから、逆鱗に触れたのです。

**佐々木**：人麻呂は持統天皇が謀略に絡んでいたとらんでいた  
根拠はあるのですか。草壁皇子の哀歌と高市皇子の哀歌だけで  
はそこまでは言えないでしょう。

**やすい**：その証拠は既に消されています。しかし梅原猛著『水  
底の歌』によれば、水刑になったほどですから、人麻呂はよほ  
ど持統天皇を告発したと取れるような作品を書いているはずで  
す。

**佐々木**：やすいさんは梅原猛のスーパー歌舞伎『ヤマトタケル』  
からヒントを得て、『古事記』のヤマトタケルの部分を梅原戯曲  
と同じような内容で書いたのではないかと推測されていますね。

**やすい**：梅原猛先生は柿本人麻呂が憑依して書いたと言われて  
いますが、それは別にして、もし人麻呂が梅原先生のように謀  
略への持統天皇の関与を疑っていたら、「ヤマトタケル」説話を  
書くときには、梅原戯曲と大同小異になったのではないでしょ  
うか。



**佐々木**：父景行天皇には亡き前皇后との間に大碓皇子と小碓皇子の双子の兄弟がいて、皇后の妹だった現皇后が、親身になって育てていたけれど、自分の子ができると、その子に皇位を継がせたくなり、大碓皇子と小碓皇子を殺そうと謀略をたてます。それに気づいた大碓皇子は、皇后を告発すれば父帝はかえって、自分を罰しようとすると考え、クーデターで父帝を殺して政権を掌握しようとし、弟にも打ち明けて、味方になるように説得したけれど、弟は断固反対したので、兄は秘密を知った弟を殺そうとして、逆に弟に殺されてしまったという内容です。

**やすい**：これは持統天皇が、自分の子の草壁皇子や孫の軽皇子に皇位を継承するために、姉の子である大津皇子を謀略で殺し、高市皇子を変死させたというのと設定が似ているわけです。

**佐々木**：なるほど、でも大碓皇子を殺したのは小碓皇子であつて、皇后ではありませんし、高市皇子はヤマトタケルのような熊襲征伐、蝦夷征伐はしていません。これでは持統天皇は自分にあてこすったものだとはいえづかなかつたのではないのでしょうか。

**やすい**：最初にあてこすりに気づいたのは藤原不比等でしょう。不比等が持統天皇にあてこすりだと指摘したと思われます。

**佐々木**：歴史小説としては面白い設定だと思いますが、史実として主張できないでしょう。なにしろ証拠は消されてしまつていて、柿本人麻呂の書いた原『古事記』は存在していないので

すから。

**やすい**：それはそうですね。だから私もひよっとしたらということまで述べています。また歴史物語として書いていますが、史実としては主張していません。ただそういうことにしますと、当時の天皇中心の律令政治についての捉え方が整理できます。

まず天武天皇の皇子、特に高市皇子を中心にする皇親政治の流れですね。皇親政治は英明な天皇ならいいですが、実際には余り期待できないので、それを支える皇子たちの団結が大切です。しかし皇子たちの間の権力闘争が激化するおそれがあります。

これに対して、誰が天皇になつても大丈夫なように、しっかりと貴族官僚による太政官官僚による太政官中心の政治を目指したのが、藤原不比等たちです。

持統天皇は、皇親政治を支えるためにもしっかりと貴族官僚による太政官体制が必要だと考え、不比等を登用して体制を確固たるものにしたのです。

これらに対して、人麻呂のような人々は英明な天皇が聖なる存在として大御心で人民の幸福のために統治する体制を求めました。

**佐々木**：結局、持統天皇は怖い女ではなかったということは、やすいさんによると、彼女は「吉野の誓い」を守って、皇子た

ちの和による皇親政治を守りながら、同時に藤原貴族官僚による官僚体制も作り出し、皇親勢力と貴族官僚の間の和も形成して、巨大な律令国家を機能させたということですね。

でも怖い女だと誤解されたのは、「吉野の誓い」に背いて自分の息子の皇位継承を実現するために、英明な大津皇子や高市皇子を謀略に嵌めたり、毒殺したという疑惑を与えてしまったからです。その濡れ衣を着せられたので、人麻呂だけは許せなかった、いかに寵愛していてもということですね。すべては藤原不比等の筋書きだったというわけですか。

**やすい**：持統天皇は、大津皇子事件で大津皇子だけ罪を問われて自害に追いやられたので、無罪になった関係者は、持統天皇の指令で動いていたのではないかと、疑惑が持統天皇に向けられているわけですが、それは単純すぎる解釈です。もし持統天皇が影で操っていたとしたら、疑惑が自分に向けられるようなやり方は避けたと思いますね。なぜなら「吉野の誓い」があるので、皇后が疑われて、皇子たちの反発を招くのはまずいからです。

もちろん不比等が動いたというより、中臣氏などの影の動きはあったでしょうが、中心人物を不比等だったと決め付けるのはどうでしょう。

ただ柿本人麻呂の失脚、流罪には持統天皇の側にいた不比等の暗躍は考えられますね。そして高市皇子の死後、軽皇子が立太子して、文武天皇になって、不比等が後見することになりま

すので、高市皇子の死が毒殺だったりした場合には、不比等の謀略が疑われます。

**佐々木**：えらく持統天皇の話だけで盛り上がってしまいました。持統天皇は「吉野の誓い」にもとづく皇親や貴族官僚の輪を尊ぶということですね。聖徳太子の和の精神を継承しようとしたということでしょう。

それは父中大兄皇子が権力に固執して蘇我本家だけでなく、蘇我石川麻呂まで謀略で滅ぼしたのとは対称的です。中大兄皇子は、讒言を信じて石川麻呂を討つわけですが、石川麻呂は戦わずに抗議の自殺をします。これは山背大兄皇子の自害を真似たわけですね。

**やすい**：石川麻呂の孫娘である持統天皇は、なんとか和の政治を実践しようとしていたのかもしれない。まあこのように聖徳太子の和の精神というのが伝統としてあるわけです。でも実際は厳しい政治力学で動いていくわけですね。そういう中で、貴族官僚独裁を実施しやすい律令を作ったのが藤原不比等たちです。

**佐々木**：奈良時代になると聖徳太子の精神を仏国土の建設と考へ、大胆な寺院建造で国家財政を傾けてしまうと聖武天皇の政治がありますね。

**やすい**：ええ、奈良時代の歴史物語も書いてありますが、石塚正英さんの問題関心領域である、日本神道論に移りましょう。

## 9、日本の宗教 日本的靈性と日本神道論

**佐々木**：「やすいゆたかの部屋」の教養講座のコーナーに『日本の宗教』が書きかけのままになっていますね。

**やすい**：ええ、これはミネルヴァ書房の編集部の方からこういうのを書いてみたらというお薦めがありました。日本の宗教を一冊で概観できるような本を書こうとしていたのです。ところがそれが編集会議で通らなかつたので、腰砕け状態になっています。まあ、これも必要な教養ですので、いずれ完成させたいとは考えていますが、今のところ、「プロローグー日本の靈性」と「第一部 日本の伝統宗教」の「第一章 八百万の神々と日本神道」しか書いていません。これから「日本の仏教」に入るところです。

**佐々木**：大阪狭山市の熟年大学で、「中国思想史講座」を担当されて、その中で『中国仏教史講話』をまとめられましたね。その勢いで日本仏教史も書けそうですね。

**やすい**：ええ、ただ先ず大きな壁というか、空海全集を読まなければならぬので、大変です。とは言いましても、梅原先生が戦後しばらくして空海を読まれたときには、まだ現在のようない懇切丁寧な註および、大変分かりやすい現代語訳つきのはなかつたので、本当に大変だったと思います。今はとても読みやすくなっています。

**佐々木**：この対談はあくまでも石塚正英さんとの対談の準備ですので、「プロローグー日本の靈性」を中心に神道をどう捉えるのかを考えていきたいと思えます。「日本の靈性」と言えば鈴木大拙の『日本の靈性』という問題作があつて、鎌倉仏教になつてから日本の靈性が成立したという捉え方への批判が出発点になると思いますが。

**やすい**：鈴木大拙のいう「靈性」というのは深い宗教的な覚りを意味しています。つまり呪いみたいなオカルト的な信仰は、便宜的なもので宗教的な深い覚りには到達してないということです。それで手に印契、心に大日如来、口に真言を唱えれば即身成仏なんていかにもお呪いで、低級なように見えたのでしよう。

**佐々木**：外面だけ見て靈性の有無を判断しているわけですね。空海の著作に内在してということではなしに。

**やすい**：最澄の天台宗というのも、天台智顛という仏教思想史のエベレストみたいな人の五時八教・一念三千・三諦円融という深い教義に基づいていますから、それを理解できていないというのなら、そのことを論証する必要がありますね。

**佐々木**：紫式部の『源氏物語』は三諦円融を方法論にして書かれていて、それで「ものあはれ」が見事に描かれています。歌物語の世界の代表作で、仏教的無常観が見事に日本人の感性として消化されているわけですね。だから本居宣長は、源氏物

語を最高傑作だとしていますが、彼はそれを日本思想だと思いつ込んでいたわけです。

**やすい**：ええ、本居宣長は「物のあはれを知る心」を日本思想として、捉え返していますが、実は三諦円融論を基にしたものですから、仏教的無常観の文学的表現だったわけです。それに本居宣長自身の「物のあはれを知る心」だって、純日本思想のように言うけれど、陽明学などの「万物一体の仁」が下敷きになっている可能性が強いわけです。とはいえ、それらは日本人の感性として洗練され、日本思想になっているわけで、我々はそれを大いに継承すべきです。

**佐々木**：鈴木大拙のいう鎌倉仏教での「靈性」に達した深い覺りというのは、一つは道元ですね。「只管打坐・修証一等」でしょう。これまでは覺りを得るためのプロセスや手段として坐禅していたけれど、そうではなくて、ひたすら坐禅すること自体が覺りなんだということですね、これは空海の即身成仏でもいえませんが、覺りということを仏陀という超人的な存在に初めて為しえるのではなくて、だれでも即座にできるみたいなところがありませんね。修行がそのまま覺りだという修証一等も同じことです。

**やすい**：ええ、ですから道元の「只管打坐・修証一等」は、空海の「即身成仏」からオカルト的要素を取り除いたものだと言えます。ということは空海の段階で既に深い覺りがあったといえますね。

**佐々木**：「即身成仏」というと簡単に仏に成れるみたいで、覺りとして低級と思われそうですね。

**やすい**：衆生済度を掲げる大乘仏教では、すべての人が仏の慈悲で救済されるのです。それで救われるだけの仏性が衆生にはあると考えたのです。と言いますのは、釈尊は法を覺って、法と一つになつたわけですが、それは森羅万象として現われるのです。したがって森羅万象は仏の姿であるとされるのです。ですから一切衆生には仏性が宿っているわけで、やがては久遠の本仏は一切衆生を救済するはずで、『法華經』では久遠の本仏が何度も生まれ変わって衆生を救済し、聴聞・縁覺ですら救済するということ二乗作仏を説いたのです。しかしそれではずっと將來のことになってしまいますね。よく考えれば一切衆生悉有仏性なのですから、そのことさえ分かっていたら、本来仏だということ、即身成仏が可能だということ、です。

**佐々木**：その場合に仏に成るためにタントラつまり真言という呪いが必要なのですね。そして浄土教なら阿弥陀如来に救ってもらうのです。ですから、空となつた仏は肉体となり煩惱に生きて、その空を知るわけですから、煩惱即菩提だということです。煩惱の空しさを知るには、煩惱で欲望に生き、欲望を克服してこそですから、この煩惱即菩提は、すごく深い悟りなのですね。

**やすい**：ええ、浄土真宗の悪人正機説や自然法爾というのが深い覺りというのならね。だって阿弥陀信仰は、元々唯識論などが大変難解であるので、自力では覺れないと見切りをつけて、

先に衆生を救うために成仏した阿弥陀仏の本願に頼ろうというのですから。

**佐々木**：結局梅原先生は、鈴木大拙は、禅宗と浄土真宗という自分が研究した宗派だけを深い霊性だとしただけで、天台宗や密教や浄土宗などあまり研究していない宗派を余り深くないと軽視しただけで、それは偏見に満ちているということですね。

**やすい**：そしてやはり「日本の霊性」というのなら、日本的な覚りのあり方を考察すべきで、それはやはり仏教なら「天台本覚思想」に本領があるということでしょうね。

**佐々木**：「一切衆生悉有仏性」から由来したと思われる、「草木国土悉皆成仏」という言葉があつて、梅原猛は人間だけではなく、動物や植物もさらに山や川など生物でないものまで成仏するという発想で、人間中心主義を克服していると評価しているようですね。

**やすい**：仏教には不殺生戒があります。「殺すなかれ」というのはモーセの「十戒」にもありますが、その対象はあくまで人間です。でも仏教やジャイナ教の不殺生戒は生きとし生けるものはすべて殺してはいけないということで、ヒューマニズムを超えているわけですね。これはユダヤ教やキリスト教の人間中心主義が自然破壊をもたらしたということで、最近、環境倫理学からも人倫重主義批判が叫ばれ始めているわけです。

**佐々木**：ええ、肉食によって栄養を取るとなると牛や豚を飼う

飼料のために小麦などが必要になります。肉食をやめて菜食だけにしたほうが、はるかに穀物が節約されるということで、環境の保全にもなるということですね。

**やすい**：それはそうですね。それに田上孝一さんが二百キロのバーベルを揚げて実証されていますが、肉食しなくても十分に体力は保てるということ、なにも嗜好だけのために動物を殺して食べることはしなくてもいいじゃないかということです。菜食主義というのはその意味で21世紀に広がる要素はあるでしょうね。

**佐々木**：日本の霊性で語る場合は、日本人は元々雑食だったようですから、菜食主義ではないですが、命の循環を大切に考えていて、穀物にしても魚にしても鹿にしても命をいただくときは「いただきます」と感謝の言葉を捧げ、手を合わせて祈るわけですね。つまり食糧になる生き物は動物にしても植物にしても神として祀られてきました。この精神こそ日本の霊性ではないでしょうか。

**やすい**：ええ、全く同感ですね。よく迷信の代表みたいに「鰯の頭も信心から」と言いますが、これは鰯の臭気を鬼が嫌がるので厄除けのために注連縄に鰯の頭をつけていたと言われます。でも捉えようによれば、鰯から命をいただいたので神として祀っているとも見えないことはありません。稲荷神社などは穀物を神としているわけですね。こういう素朴な信仰が大変深い命の循環によって生かされているという覚りであつて、これこそ日本の霊性となりますと、鎌倉時代まで日本の霊性がなかったな

んでいう鈴木大拙のセンスは大いに疑っていいと思いますね。

**佐々木**：そこで日本の靈性の特色として、元々は、信仰が物心二元論というか、物と靈の二元論になっていなかったということですね。

**やすい**：「靈」は「たま」とも読まれたりします。「玉」だと宝石みたいに美しい石ころです。ですから靈も元々は物なのです。物質に対する精神的実体ではないのです。生命体には可死の部分と不死の部分があると捉えられています。肉体は滅んで土に帰ってしまいます。つまり肉体の大部分は滅び去るわけです。ただ肉体の一部が不死の部分なのです。これが靈の部分です。死にますと、肉体から離れて変態します。鳥になったり、蝶々になったり、魚になったりします。

**佐々木**：それで異界に行つて、そこでセックスで母胎に入つて誕生する。異界で死んだら、今度はこの世にやってくる。セックスで母胎に入つてまた誕生する。その繰り返しですね。

**やすい**：ただしこの世に恨みや未練があると死んでも異界に往けずに、この世に留まっていることがあります。また異界との往還を信じられない人も当然いまして、靈は死後、変態しましで、霧になったり、雲になったり、風になったり、あるいは天に昇つて星になったりするという人もいるわけです。

**佐々木**：そういう発想があるので、『千の風になつて』という歌が爆発的にヒットしたのですね。つまり天地自然が人間の靈の

現れ、変態として捉え返されるということ、まさしく自然の大なる命と一体として人間が捉えられているということですね。それこそ深い覚りで日本の靈性と言えますね。

**やすい**：靈を精神的実体として非物質的に捉えたのが何時ごろからで、どういうきっかけが解明できればいいのですが、その辺ははっきりしません。

**佐々木**：例えば固体・液体・気体という形で物質を三態で考えますが、それは近代的な分け方ですね。液体や気体でも物質ですが、例えば靈が気体に変態して別人や獣などに入ったとしたらそれで憑物信仰が成り立ちます。それを近代人の靈概念で解釈して、靈を精神的実体と捉えていたとも解釈できますね。だから仮令、未開時代にシャーマニズムが発達したとしても、それはデカルトのいうような物質一般と峻別された精神的実体としての靈には当たらないのかもしれないですね。

**やすい**：なるほど、そうとも言えますね。プラトンの魂としての理性も物質的には火と同一視されていて、死後天に昇つて魂の故郷で、イデアの体系を織り上げるといふことですからね。精神的実体といつても、完全に物質と峻別されたのは、プロチノスの新プラトン派以降だということらしいですね。

**佐々木**：それでやはり問題は、梅原さんの異界論です。梅原さんは、あの世とこの世をほとんど同じようなところとされながら、アイヌのイオマンテのユーカラから、熊送りであの世に送られた熊の靈が、あの世では人の姿をしているということですよ。

ね。つまりあの世は霊界として捉えられていて、そしてしかも霊の姿は、人も熊も木もみんな人の姿だということです。

**やすい**：だから私はアイヌは蝦夷(えみし)の子孫で、蝦夷(えぞ)で未開化したけれど、陸奥にいたころは浄土教文化を作り上げていたわけで、あの世が霊界というのも浄土教や交易の発達と関連するのではないかと解釈しています。

**佐々木**：つまり縄文文化のあの世観では、あの世もこの世と同様に肉体を持ち、セックスで生まれて、食事をして年を取ったということですね。そして熊送りは、縄文時代はおそらくトーテムズの論理で行なわれていたわけですね。

**やすい**：でしょうね。熊と熊祀りをする部族の人は共通の祖先から生まれていて、この世で人はあの世で熊になり、この世で熊はあの世で人になるというように捉えられていたのではないのでしょうか。梅原先生はフェティシズムやトーテムズの理論についてはあまり詳しくはなさそうですね。彼は実際に現地でその土地の風物や伝承に触れながら考える行動的なタイプです。そういう人類学の理論の型に嵌めて考えるということとはなさらないようですね。そこがあるいは限界がもしれません。

**佐々木**：ヤマトタケル伝承でも、ヤマトタケルは埋葬されますが、人間の背丈の八倍ぐらいの大千鳥・大白鳥になって飛び立ちます。後には衣しか残らなかつたわけで、ヤマトタケルの身体がまるごと鳥に変態したわけです。ということはヤマトタケルは大変尊いので、身体全体が不死なる霊であつたと言いたいの

でしょう。肉と霊が物質と精神の二元論でなかったことが、『日本書紀』の記述でも分かるのです。

**やすい**：それに「三種の神器」八咫鏡・八咫瓊勾玉・天叢雲剣などはそれ自体の物が神です。そこに神が宿っているというようなものではないわけです。天叢雲剣で列島の覇権を握れるのは、天叢雲剣が日本列島を象徴する八岐大蛇の体内から取り出された、列島の霊だからといわれます。つまり剣という物が霊だということです。

**佐々木**：山や川なども恵みをもたらしますから、そのまま神として崇拜されます。神降り立つとされる岩は石座として神聖な場所されますが、元々は、岩や石自体が神とされていたらしいですね。それから食物もそれ自体が神なのです。つまり事物と神霊を分けて、神霊が宿っているから神なのではなく、我々の命を与えてくれるからその物自体が神だつたわけです。

**やすい**：ですから、元々の日本の靈性は自然に神霊が宿するというアニミズムではなく、そのままの自然信仰だつたわけです。つまり神霊と事物という二元論はなかつたわけです。

**佐々木**：しかしシャーマニズムの存在や異界信仰の起源が縄文時代からも考えられるわけですから、物と対極ではなくても、変態したり、憑依したりする霊についての信仰は認めるべきでしょう。

**やすい**：それはそうですね。ただ霊も物だつたということは重

要です。神霊と事物の二元論に徹してしましますと、霊が事物の根源として捉えられ、霊によって事物が生じたというような観念論や形而上学になりかねません。

**佐々木**：ギリシア哲学の発生の問題と関連してきますね。古代ギリシアでは、神霊がイデアにまでなっていて、事物はイデアの現れになってしまった。事物は本質であるイデアの仮の姿でしかなく、真の实在は観念的な存在とされました。その真知としてのイデアへの希求がフィロソフィアつまり愛知としての哲学だというわけです。だから哲学は事実存在の根底にある本質存在を知ろうとする理性の学だということで、そういう普遍妥当的理性をフィクションだと考えたニーチェは反哲学の立場に立っていたといわれますね。

**やすい**：木田元さんの反哲学ですね。日下部吉信さんは『ギリシア哲学と主観性』（法政大学出版局）で、反形而上学とは言われるけれど、反哲学ということは言われませんね。フィロソフィアは、ソクラテスの造語で、プラトンの造語ではありません。ところがご承知のように、ソクラテスは殆どプラトンの著作で語っているわけですから、プラトンがソクラテスの真意を伝えているのかどうか疑問です。

**佐々木**：そう言えば、やすいさんはソクラテスの対話法は独断的な知による専制やソフィスト的な懐疑論によるアナキズムを退けて、無知の知に戻って、みんな納得できる普遍妥当的な知を積み上げるデモクラシーの立場であって、プラトンのような哲人王政治ではないとされていますね。

**やすい**：ええ、ソクラテスが判決に服したのは、その判決が正しい理性的な判決だったからではなく、民主的な手続きの元で行なわれた判決だったからです。皆で決めたことを皆で守っていつてこそ、ポリスは存立しえるわけです。もし哲人王政治を希求していたのなら、非理性的な判決に服することはかえって間違ったことになるでしょう。

**佐々木**：それじゃあソクラテスの求めていた知は形而上学的なイデアというよりは、それこそ皆を納得させ心をつにしてポリスの繁栄と市民の幸福をもたらす知だということですね。

**やすい**：プラトンの著作からソクラテス像を構築してそこからフィロソフィーの知を形而上学的な知の体系で、現象を生み出すような神の理性だというように展開するのは、かなり飛躍ですね。フィロソフィーは西周も指摘していたと思いますが、自分の知が、まだ確立していないので、無知であるという謙遜が入っているからです。「智者(ソフィスト)ではなくて「愛知者(フィロソファー)」だということなんです。ですから彼の求めていく知は対話によって形成される知であって、その知がポリスの基礎になるということですね。決して事物の中にある、事物を生み出した真実としてのイデアではないのです。

**佐々木**：ではむしろプラトン以降の形而上学的知の方が「反哲学」だということですか。

**やすい**：そんな排他的に哲学を定義する必要はありません。形



而上学的知が真実在で、事物の根拠と考えて、その知の体系を  
求めるのも哲学なら、事実には照らしてそこから法則性や本質を  
見出して物を理解し、変革しようとする知も哲学です。

物を根源的に捉え返して、原理的に誰もが納得できるように  
一貫して説明しようとする態度があれば、そこに哲学がある  
わけです。もちろん哲学は宗教ではないですから、同じ前提に  
立てば、どのように展開すべきか、大いに疑問を提出し、議論  
できる開かれたものでなければなりません。

木田元さんの矛盾は、反哲学も哲学だという哲学の二重定義  
に陥ってしまうことです。本当に反哲学を主張されるのなら、  
反哲学という知の在り方を明確にして、反哲学という学問を確  
立すべきでしょう。元々、学の本来のあり方が哲学なのであり、  
あらゆる学は哲学であるべきだという立場にたつべきです。

**佐々木**：やすいさんは「哲学の大樹」という立場ですから、形  
而上学的立場と実証的立場を相互補完的に考えられるのでし  
ょう。

**やすい**：もちろんその場合に両方とも脱構築しなければならな  
いでしょね。

**佐々木**：反哲学論になるとマルクス学も関わってきますので、  
日本の霊性と神道に戻しますが、日本の霊性が非形而上学的な  
ものだったとしたら、二千五百年の西欧形而上学をトータルに  
超える原理があるということになりませんか。

**やすい**：ええ。もちろんそういう予感があつて、梅原先生も天  
台本覚思想の再評価に取り組んでおられるわけです。ただね、  
安直に西欧形而上学を十羽一からげに二元論だというのはどう  
でしょう。デカルト的な二元論にドイツ観念論を「意識と存在  
の同一」を掲げて対抗しましたが、そのロマン主義からは大い  
に学ぶべきものがあります。

**佐々木**：それにハイデッガーたちが反哲学を掲げて存在論に還  
帰したと言つても、物の支配からの脱却といつても、物を包括  
した立場に立てない限り、掛け声だけではないかというのが、  
やすいさんのネオヒューマニズムからの批判ですね。その意味  
で「いただきます」という挨拶の中に、大いなる生命の共生と  
循環を踏まえて、物を包括する立場があるわけで、日本の霊性  
は生きていて、おおいに現代的意義があるということでしょう  
ね。

**やすい**：『中国思想史講座』についてはそのうち追加します。い  
ったんここまでであげておきます。